

三月興行

文樂座人形淨瑠璃



文樂座

橋ッ四

一冊金十五錢

春ご 文 樂

郷土香溢る我等が

人形淨瑠璃

萌え立つ早春の明則さ、まづみなさまの御晴やかな御機嫌を祝福いたします。文樂を護れ!!の況き篤き御聲援の激勵に一座全員は確固不拔の精進をつづけてゐます。その文樂が爰に駘蕩三月の華を飾るべく恰も初演に等しき珍らしき古曲の復興を、更に名だたる傑作を並べ且淨曲界に新らしき動向を見せた新作を堂々上演し春宵一夕の宴に供さんとするもの演者の熱意に切なる御後援をお希ひ申上げます。

昭和十年三月

四ッ橋

文 樂 座

昭和十年三月一日初日

初二日  
日 午後二時 開幕  
三日目より 午後三時 開幕

二日目よりの

御 觀 覽 料

一等椅子席 御一名 金三圓  
二等 席 御一名 金一圓三十錢  
三等 席 御一名 金七十錢  
一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席は五日前より  
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七二番  
專用電話

電話 南 三〇三二番  
三七八八番

お草履の準備は御座のますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へツカへ廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あゆらるる印刷所  
永井日英堂印刷所

大阪市西区土佐堀一丁目  
電話 土佐堀④長三〇八番  
電話 土佐堀④長三〇八番  
電話 土佐堀④長三〇八番  
電話 土佐堀④長三〇八番

電話 土佐堀④長三〇八番

天竺山 天竺山 天竺山

三味線

天竺山 天竺山 天竺山



技絶の品名・興復の曲古・味興の作新

るざかを月三春陽

璃 瑠 淨 形 人 樂 文

(表 間 時 定 豫)

壽式三番叟  
ことぶきしきさんばんそう

午後三時より三時三十五分まで  
幕間 十分

岡本綺堂原作  
大森痴雪脚色  
修禪寺物語  
しゅうぜんじものものがたり

豊澤廣助作曲  
夜叉王内の段  
三時四十五分より四時廿五分まで  
幕間 十分

桂川連理柵  
かづらがはれんりのしがらみ

六角堂の段  
帯屋の段  
四時三十五分より六時まで  
幕間 十分

信洲川中島合戦  
しんしゅうかはななかじまかつせん

輝虎配膳の段  
直江屋敷の段  
お食事時間  
六時十五分より八時五分まで  
幕間 十分

梅川冥途の飛脚  
うめがわめいどうのひきやく

淡路町の段  
新町封印切の段  
八時十五分より十時五分まで  
幕間 十分

鶴澤友次郎調

京鹿子娘道成寺  
きやうかのこむすめどうぜうじ

鐘供養の段  
十時十五分より十時四十分まで



壽式三番叟

壽式三番叟

翁

千歳 竹本文字大夫

三番叟 竹本大隅大夫

三番叟 豊竹呂大夫

竹本陸路大夫

竹本播路大夫

竹本隅榮大夫

竹本小松大夫

竹本むら大夫

鶴澤道八

野澤勝平

鶴澤芳之助

鶴澤友衛門

鶴澤寛太

鶴澤叶太郎

ります。

(床本) 壽式三番叟

能曲の神聖な祝儀物に翁、千歳、三番叟の舞があり、翁を天照大神に千歳を八幡大神に三番叟を春日明神に擬し翁の面を樂屋に安置して神酒を供へ舞臺へ立つものは精進潔齋して演じたと傳へられてゐます。翁千歳三番叟の起源に就ては一説には東歐ヘルシヤ邊の祈念の舞踊が支那を経由して渡來したもので『たうたうたらり』といふ言葉は西藏語の神といふやうな意味であるといふし、又この曲が他の摺り足の舞式でなく、はれ踊るダンス式であるといふことも大いに此説を傾聴せしめる資料であ

夫豊秋津洲の大日本。國常立の尊より天津神七世の後。地神の始天照大神岩月に籠らせ給ひし時。世は常闇と成りけらし。其時に四方津神。八百萬の御神達、神集に集め給ひ燎火をたいて庭神樂神すししめこ木綿禊太祝詞の。神歌や式三番の其謂おさく申も恐あり。さうくたらりく。たらりありらりらりらりらり。ちりやたらり。たらりあり。たらりさう。鳴るは瀧の水日は照共たへすさうたりありうさうく。さうくさ鳴る鼓。宇佐の神の御役

人形

豊澤新太 豊澤勝太郎  
野澤道造 野澤勝之介  
鶴澤一 野澤一郎右衛門

千歳 吉田文作  
三番叟 桐竹門造  
三番叟 桐竹紋十郎  
三番叟 吉田扇太郎

にて。笛の初音も高窓や。笛吹の大  
明神。大鼓は高野の大明神。大鼓は  
熱田の源大夫。いづれも秘曲の打囃  
子鳴は瀧の水。日は照神の神勇めさ  
れば春日の大明神、翁の袂ひるかへ  
す。扇の手こそ面白や。背にぎて青  
丹よし、奈良の都の三笠山。かけ  
もあらたに慈悲萬行七五三の歩みの  
大事十五の拍子、さりくんに萬代の  
池の龜は甲に、三曲を戴いたり瀧の  
水麗々ミ落ちて、夜の月あざやかに  
うかんだり。渚の砂さくくさして  
且の日の色をらうす。天下泰平、國  
土安穩の今日の御祈禱なり。千秋萬  
歳悦びの舞なれば一舞まはふ萬歳樂  
萬歳樂。くく。長久圓滿息才延  
命。今日の御祈禱なり。おさへく  
おふ悦びありや、我此所よりも、外

へは行かじこそ思ふ物の音につれて  
立舞ふ小忌衣、千歳は近江なる、白  
髪ひげの御神なり、黒くろき尉ゑうは住吉の太神  
鼓つづみは浪なみのこふこ打音うちねは高間たかまが原はらなれ  
や岩戸いわほに向ふ神かみかぐら、ふそるぐせ  
りそ吹ふ笛ふエも、ひりやひしぎの音色ねいろ迄  
春はるは霞かすみの立姿たちすがた、サンバン、物ものに心得  
たる後あとの大夫たいふ殿どのにげんぎう申まをそう、  
アトてうご參まをつて候さう、サンバン、誰たが  
お立たち候さうぞ、アト年頃としざとの朋輩ともだち友達ともだち御後みあと  
の爲ために罷まり出でて候さう、今日の三番叟さんぱんそう猿樂さるがく  
きりく尋常じんじょうに舞まをておりそへ、色いろの  
黒くろい尉ゑう殿どの、サンバン、此色このいろの黒くろき尉ゑう  
が今日こんにちの御祈禱ごごきを千秋萬歳せんしゅうばんざい所ところ繁昌はんしょうと  
舞納まをめふする事ことは何なにより以もつて安やすふぞ  
う。先後さきあとの太夫たふ殿どのは元もとの座敷ざしきへおも  
く御直ごちり候さうへ。アト某それが元もとの座  
敷ざしきへ直ちらうする事ことは尉殿ゑうどのの舞まをよりも

いさ安ふぞう、御舞なふては直り候  
まじ御舞候へ、サンバン、御直り候  
へ御舞候へ、サンバン、あゝゆるは  
たしやアトさらば鈴を参らせふ、サ  
ンバン、そなたこそ、初日は諸願  
満足圓滿二日の日は又二ツ柱鉦女の

神子が一、二、三、四、五、六、七  
八九度か百千萬の舞の袖五月のさ女  
房が笠の緒を列れて早苗おつこり打  
上げて諷ふた千町萬町、億萬町三人  
田をばぞんぶりぞくそんぶりく  
くぞ御田を植るならば笠かふて着  
ひふぞ、笠買ふてたもるならば猶も  
田を植ふよ、三日は福德壽福圓滿子  
徳人の子寶車座にならべた。たつま  
ついるまつかいつくひつ付大うち袋

にふりぞ付て候ぞ、是式三の故實  
にて、三日、是を舞さかや柳は綠花  
は紅、數々や濱の眞砂に盡る共、盡  
せぬ和歌ぞ敷島の神の致の國津民治  
まる家こそ目出たけれ。



夜叉王内の段

夜 姉 妹 頼 五 坊 春

又 桂

王 女 楓 家 郎 主 彦

豊竹駒太夫  
竹本南都太夫  
竹本小春太夫  
豊竹和泉太夫  
豊竹富太夫  
豊竹辰太夫  
豊竹千駒太夫  
豊竹竹太夫  
豊澤廣助

人形

夜 姉 妹 源 下 春 坊

又

王 桂 楓 家 郎 主 彦  
田 頼 五

吉田榮三  
桐竹紋十郎  
吉田扇太郎  
吉田玉幸  
吉田榮三郎  
桐竹紋太郎  
吉田榮三郎  
吉田榮三郎  
吉田榮三郎

修禪寺物語

今度始めて淨曲化されたもので筋は伊豆伊東の面作師に夜叉王があつた姉娘を桂、妹娘を楓といふて姉の妹の性格は相反してゐた。夜叉王は頼家から面の製作を頼まれてゐたが日が過ぎて頼家自身出かけての催促に會つた。職人氣質の夜叉王は何時出来上ることも判らぬといふやうに挨拶をした。疍癖持の頼家は怒りて夜叉王を手討にせんとしたが姉娘の桂がなだめて父が彫上である面を頼家に見せるよ喜び桂を側女に申受けやうと言ふ、桂は進んで頼家について行く、夜叉王は將軍の威光で心に添はぬ作品を出したこゝは一生の恥

今度始めて淨曲化されたもので筋は伊豆伊東の面作師に夜叉王があつた姉娘を桂、妹娘を楓といふて姉の妹の性格は相反してゐた。夜叉王は頼家から面の製作を頼まれてゐたが日が過ぎて頼家自身出かけての催促に會つた。職人氣質の夜叉王は何時出来上ることも判らぬといふやうに挨拶をした。疍癖持の頼家は怒りて夜叉王を手討にせんとしたが姉娘の桂がなだめて父が彫上である面を頼家に見せるよ喜び桂を側女に申受けやうと言ふ、桂は進んで頼家について行く、夜叉王は將軍の威光で心に添はぬ作品を出したこゝは一生の恥

こして今日限りと覺悟して數々の面を打毀しにかゝる。妹娘の楓も止める、後北條勢の爲に頼家が夜討されるも聞いて夜叉王は以前何度も打込んだ頼家の面に死の影が現はられた所以を始めて知り遠に自身の秘術を喜んだ。其時傷を負て歸て來た桂を目前に若き女の斷末魔の面、後の手本にぞ死に行く娘の面體を白紙に寫した。

秋至りて清砧を拭ふ。己に苦寒の月近く況んや長別の心を經るをや彼の唐詩にうたひたる、それはいにしへ戦のにはにめされし夫の爲め妻が衣をうつ砧、これは父をば手助けの姉妹はげむ紙砧、音丁々澄み渡る

(床本) 修禪寺物語

秋の日さしも傾むく頃、姉のかつら  
はうつ手をさごめ詞 M 一响餘りも  
打ちつゝけたので肩も痺る、やうな  
もうよいほどにして止めうではある  
まいか云へば妹にたしなめ顔詞 M  
貧の手業に姉妹が、年頃うちなれた  
紙砧を、兎角に飽きた、嫌になつた  
さ昔に變るお前のこの頃、ま、ご  
うしたこも、さいふを遮り詞 M 私  
や昔からこの様なこ好きではな  
つた、父さまが鎌倉におゐでなされ  
たら、わしらもかうはあるまいもの  
を、名聞を好まれぬ職人氣質さて、  
この伊豆の山家に隠れ棲み、親につ  
れて子供までも鄙に育て、詮事なし  
に今の身の上、さりさてこのまゝに  
朽ち果てうとは夢にも思はぬ。近い  
ためしは今わたし等が打つてゐるこ

の修禪紙、はじめは賤しい人の手に  
造られても、色好紙と世に出づれば  
高貴のお方の手にも觸るゝ女子さて  
もその通り、たごひ賤しう育つても  
色好紙の色よくば關白、大臣、將軍  
家のおそばへも召出されぬものでも  
ない、賤の女がなりはひの望みも薄  
い紙砧、いつまで打ちばならはふさ  
も、はてどうならう、嫌ひさいふは  
愛のこも、それでもわたしが無理か  
いな詞 M あい、人には人それぐ  
の分がある、將軍家のお側近う召さ  
るゝなごゝ夢のやうなお前の望み私  
は案じられてならぬわいな、さ實意  
の言葉も思ひある姉にはいさ腹立  
たしく詞 M これ妹、お前は今年  
十八で春彦さいふ郎をもつ、それに  
は引替へ姉のわたしは二十歳さいふ

今日のひまで夫を定めず通したはあ  
たら一生を草の家に住み果つまいと  
思へばこそ職人風情の妻となり満足  
して暮すお前にはわたしは心ばわか  
るまい、ホー、ホー、砧からりさ  
空囁く、風ばかりは雑念も防ぐ隔て  
蒲簾内より主人の聲さして詞 M  
え、騒がしい鎮まらぬか、またしな  
められて妹かへで詞 M 由ないこ  
をいひ暮り父さんの細工の障け、  
妹の身で意見むましいこそいふた  
は私の誤り姉様叱つて下さります  
な、と詫げればこなたはうちほい笑  
み詞 M 何の叱らう叱りはせぬ姉妹  
のいさかひはまゝあるこそ珍らしう  
もあるまいわいこ小袴の木屑うち拂  
いこ細工場出る伊豆の夜叉王、詞  
M げふももう暮るゝぞ、春彦は詭

へて置いた小刀さりに大仁の町まで  
行たがやびて戻らう、そちたち夕飯  
の支度でもせい、あい／＼と二人は  
立つて納戸の方、こもす燈火に日は  
落ちて鐘の無常を告げ渡る。その源  
は鳥羽玉のくらし略みに天が下狹め  
られつゝ鎌倉を伊豆の國なる修禪寺  
に身をよせ給ふ頼家卿、下田の五郎  
召し供して微行姿の門の口、案内の  
寺僧つゝさ入り、詞 M 夜又王殿、  
將軍家の御しのびでござるぞ、ご訪  
ふ聲夜又王驚き出で迎へ詞 M 思ひ  
もよらぬお成り先づあれへさうや  
くしく座に招じ詞 M して御用の  
趣きは、ご問ふ間もあらせず頼家卿  
詞 M こりや夜又王、わが面体を後  
のかたみに残さんご先にその方を召  
し出し頼家に似せたる面を作れと繪

姿までも遣はし置きたるに、日を經  
るも出来せず幾度びか延引を申立つ  
るは餘りの懈怠、おのれ何故に細工  
を怠り居るか、仔細を申せ、ご激し  
きみ言葉、夜又王お前に手を仕へ、  
詞 M は、ッ、御立腹恐入りまして  
ござりまする。勿体なくも征夷大將  
軍、源氏の棟梁のお姿を彫めごある  
は職のほまれ身の面目、いかでか等  
閑に存じませうや、御用承りまして  
より、夜晝さなく打ちましても意に  
かなふほどのもの一つもなく、更に  
打ち替へ作り替へて心ならずも延引  
に延引をかされましたる次第何卒お  
察し下さりませと謹んで申上ぐるを  
遮る五郎詞その申譯は聞き飽いた、  
この上へいつの頃までには必らずご  
期日を定めてお詫び申せと權柄なり

夜又王恐るゝ體もなく詞生なき生木  
を削りなし、男、女、天人、夜又、  
羅刹、ありごあらゆる善惡邪正のた  
ましひを打ち込む面作師、五体にみ  
なざる精力が兩の腕におのづからあ  
つまる時、わが魂は流るゝ如く彼  
に通ひて、はじめて面を作られませ  
う、但しその時は半月の後か一月の  
後か、あるひは一年二年の後か、わ  
れながらしらかわからぬその期日、  
たごお咎め受けうごも、心に染ま  
ぬ細工をば世に残すのは無念でござ  
る、ご云はせも果す頼家卿はくわッ  
ご急ぎ立ち詞おのれ、無念ぢやご申  
したな、しからば如何なる祟りを受  
けうごも早急には出来ぬごいふか、  
はッ、恐れながら。うむ覺悟いたせ  
ご大刀引つ取つて、あはやみ見ゆる

その体に、桂は一間を走り出でまあ  
 く待つて下さりませ。これ父様、  
 もうこの上は是非がござんすまい、  
 ゆふべ漸う出来した、あの面、上様  
 に献上なされて、どうぞこの場の難  
 儀をばさ、いへども屈せぬ一徹心詞  
 命が惜しいか、名が惜しいか、そち  
 の知つたことではないわい。いえい  
 え父様の御成敗におあひなさを、  
 何さして見ていらませう、これ、  
 かへで、妹その面を早うく急  
 き立つればあいさ答へて妹かへで  
 面箱たづさへ立出る姉は御前にうや  
 くしく詞父に詐りのない證據、こ  
 れ御覽下さりませと捧ぐる木彫の御  
 面打、ちまもりく詞お、見事、  
 遠は夜叉王、よふ打つたぞ、あつげ  
 れなり、満足と感謝餘念もなかりけ

り夜叉王形をあらためて詞それなる  
 面をあつげればこの御賞美は憚りなが  
 らおめがれ違ひ、年ごろあまた打ち  
 たる面は生ける如しと人も云ひわれ  
 も許して居りましたが不思議やた  
 びの面に限り幾たびさなく打ち直  
 すもかつて生きたる色もなく、魂  
 もなき死人の相、殊更それなる面の  
 眼、恨みを宿して呪ふも如く怨霊怪  
 異なんごのたぐひ、これこそ夜叉王  
 が一生不出來、平に今暫らくの御猶  
 豫を願ふをさえぎり、詞兎にも角に  
 もこの面頼家も心になふた、強て  
 の所望ぢや持ち歸るご仰せに今は力  
 なく御意に従ふ夜叉王が心の溜息、  
 はらから安堵の太息つくくご見  
 やり給ふて頼家卿詞かされて主人に  
 所望がある、これなる姉妹を予が手

許に召仕ひたう存するが、奉公さす  
 る心はないかご御言葉詞は、有  
 難い御意にはござりまするが、これ  
 は本人の心任せ、親の口から御返事  
 は申上げられませぬ、ご聞いて桂は  
 飛び立つ思、詞父様、どうぞ私に御  
 奉公をさ遠にあさは云ひさして月の  
 面に袖の雲差を含むも風情なり、  
 詞うひ奴、予に奉公を望むご申すか  
 はいさかつらば夢見るころ、鎌倉  
 山に時めいておはしましなば誰あら  
 う日本一の將軍様、山家育ちの我々  
 は下司にもお使ひなされまいに、御  
 果報拙くましますが勿体ながら私の  
 果報忘れませぬこの三月、窟詣の  
 下向路、こな桂の川上ではじめて  
 お目見え申した折、女夫桂のふるご  
 さを申上げたを上様は人に女夫は

ありさうなと賤しい私にお戯れ、  
そのお言葉が冥加に餘りこの願必ら  
すかなやうと一百日のその間、人に  
も知らさず、齋へ日参その効あつて  
今日今宵御側に召さるゝ身の果報、こ  
の御恩にはたらばぬながら命をかけ  
ての御奉公現世はおるか後の世かけ  
てどうぞお見捨てない様に、娘、心  
一筋に思ひ入つたる風情なり、詞、これ  
妹、お前は先程夢のやうな望みが今  
かなうたが喜びいさむ新月の桂のか  
げの光り増す。夜の更けぬ間に早お  
立ちまゝ家來のすゝめに頼家卿、詞、こり  
や桂、これよりその面をさへげて供  
いたせ、夜叉王褒美は改めて、立  
ち出で給ふ御傍に、そふて桂ばいそ  
くさ父さん妹、おさらば、さら  
ばあしたを待たぬ人の身さささられ

ばこそ修禪寺の御館をさして。  
出て行く。はや更け渡る夜半の秋月  
さへ西に入るかたの雲たち騒ぎ名に  
し負ふ桂の川の川浪も音湧えまざる  
折からに、耳をつんざく陣鐘、早鐘  
素破事こそ夜叉王かへで扉にかけ  
出で耳をすまし詞、俄かに聞ゆる人馬  
の物音、はて夜討か詞、え、若しや修  
禪寺へ平家の殘黨か、鎌倉の討手か  
向ふたのちやござんすまいか、姉様  
は何さなされう、どうなされたであ  
らうか、立つて見、居て見氣もそ  
ゆる逸散走りかけ戻る婿の彦春、詞  
寄手は鎌倉の北森方、大仁の町の戻  
り道、それぞ知つて修禪寺まで駈け  
つけたが前後の門は皆圍まれ翼なけ  
れば入るこまかなはず、小勢ながら  
近習の衆が火花を散らして追つ返し

つ、今が合戦最中ちやと、息つきあ  
へず物語る、またも聞ゆる御寺の早  
鐘、近づく雄叫び激しき太刀音、あ  
なやこ見ゆる表口、誰とも知らず手  
負ひの若武者控さなるを春彦駈けよ  
り抱き起し、見れば血汐は直垂の綾  
もわかたぬからくれなる詞、これ傷は  
淺うござりまするぞ、心を確かに持  
たせられいよ呼び生けられて眼を見  
聞き詞、お、妹、春彦殿、父様は何  
處にちやさ、いふはまさしく桂の聲  
夜叉王はかけ寄つて詞、お、娘、この  
体はと問はれて苦しき息をつぎ、詞、鎌  
倉勢が不意の夜討、味方は小人數、  
必死に戦ふ、女でこそあれこの桂も  
御奉公初めの御奉公納め、この面を  
つけてお身がはり、早速の分別、月  
の暗きを幸に打物取つて庭に下り

立ち、左金吾頼家これにありと呼ば  
ばりく走せ出れば、群がる敵は夜  
目遠目、まここの上様ぞ心得て詞  
うん、さては上様のお身替りとなつ  
て、こゝまで斯く抜け参つたか、健  
氣なり出かしたと、父の言葉に妹  
は悲しく詞さはいふものゝこのお姿  
姉様死んで下さるなと、わつさばか  
りに取組る、命からく以前の件備  
門口より轉び入り詞大變ぢやく際  
まうて下されく、や、桂殿のな  
も手を負はれたか詞してく上様に  
は詞お悼はしや御最期ぢや詞えいそ  
んなら上様には心の張弓切れて  
正体もなく泣き沈む、夜叉王は血に  
染みし面取り上げぢつと見て幾度び  
打ち直してもこの面に死相のありあ  
りと見えたるはわれ拙きにあらす、

源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき  
御運さは、今こいふ今はじめて覺つ  
た、神ならで知らしめされぬ人のさ  
だめ、先づわが作にあらはれしは、  
自然の感應、自然の妙、技藝神に入  
るさはこのことよ、伊豆の夜叉王、  
われながら天晴れ天下一ぢやなう、  
ハ、ハ、ハ、ハ、技の前には肉身の歎き  
もよそに喜ぶ体、手負も苦しき息の  
下詞ホ、ハ、ハ、ハ、私も天晴れお局様  
たさひ半時一時でも將軍家のお側に  
召され出世の望みが叶ふたからは、  
死んでも本望、ちつとも早ふ上様の  
お跡をしたふて冥土の御供と、いふ  
聲さへも知死期の苦痛、夜叉王はに  
ちり寄り詞やれ娘、若き女子が鬘末  
覺の面、後の手本に寫して置きたい  
苦痛をこらへて暫らく待てと、筆執

り上げて一心不亂、寫す面は死の相  
の次第く浮び来る、今を限りの  
玉の緒やなふ悲しやと取亂す、妹  
夫婦の血の涙、南無阿彌陀佛の誓尊  
き修禪寺頼家卿の御面と共に涙の物  
語、今の世までも傳へけり。



六角堂の段

竹本鑑太夫  
豊澤新左衛門

桂川連理柵

六角堂の段  
帯屋の段

人形

女房 おきぬ 吉田文五郎  
丁稚 長吉 吉田玉次郎  
弟 儀兵衛 吉田玉藏  
玉松改メ

このお半長右衛門の事件は「曾根崎模様」宮園節の「朧の桂川」歌舞伎の「桂川仇白波」に仕組まれ好評を博したのを安永五年十月北堀江座に菅専助が書下し上演したもので上下二巻になつてわり、「道行戀の乗かけ」、「石部の宿」、「信濃屋」が上の巻にこんご上演さるゝ「六角堂」「帯屋」が下の巻になつてゐます。その内容にいたつては種々區々の巷説が傳へられて來てゐますが淨瑠璃の方では結局、「戀は思案の餘」を

取つてゐます。帯屋の長右衛門は遠州からの歸りがけ石部の宿で伊勢詣りから歸る信濃屋の娘お半、丁稚の長吉、乳母等と同宿しました。その夜長吉が無態の戀慕からお半は長右衛門の部屋へ遁ればしなくもそこで十三のお半と四十五分盛りの長右衛門との奇しき契りが結ばれます。長右衛門の女房お絹は人一倍の貞女で夫とお半との仲を知り乍ら家内に浪風の立つ瀬戸には何時も夫を庇ひます、義理ある家の中の浪風に心を痛めてゐる上にお半の腹帯、それにすりかへられた政宗の詮議、等所詮生きて甲斐なき命とお半を連れて桂川へ身を投げるこいふ筋になつてゐます。

(床本) 六角堂の段

名に高き爰も都に隠れなき六角堂といふ靈地有り我思ふ心の内は六つの角只丸かれそ夫婦中祈る願ひかくるく御堂を廻り帯屋のお絹供さへつれぬお百度参りまはり仕廻の圖をかながへ後を慕ふて小舅儀兵衛アコレくお絹様ちよつとく小影へ招き奇特に毎月お百度はいかなる願ひでましますぞへハテ女子の願ひはいつ迄も夫婦中よう第一は舅御様御夫婦のどうそお氣に違はぬ様にご観音さまへかける御苦勞したり貞女かなく其心に惚れた我ら明くれくどげどむこい返事夫婦中よふ祈つても兄貴は魂か返つて有るマ美しくいこなんを置いて河東へ這入込自前の藝

子にマひごい乗り夫でたらいで隣りのお半にひきを入れたを知らずかへア儀兵衛様やくたいもない折々の東通ひは殿御の有内柄さかいひ年も行かぬお半様そんな事か何のあるそりや皆世間のいひなし、てんごうにも言ふて下さんすなテモマ愚粹人では有るはいのみだらな證據はコレ此状じやてな長さん参るお半より此片かはもごきな状か有てもまだそふでないかいのム、成程ソリヤマア合點の行ぬ文一寸貸て下さんせヲツトどつこい久しいものじやがサアそれから御らふじハ、い、ち、こ、此方に入用な證據の状それ共にわしが言事うんさいふ心ならハテやるまいものでもないサアどふする氣ぢやミ寄添へばうるさふ思へご男の爲荒立ては

ご上手者も主ある私をよもやご思へご眞實ならばおりを見てエ、忝いそんなら手附にお口を祝ふアコレ人が見る先へくへ突飛されてななく後から早ふも尻くちり観音堂を別れ行、後につくくりさつ置つ思案に逝はも忘る、お絹寺内へ不躰看籠さげてふらく丁稚の長吉やお絹さんじやないかいな爰に何してござりますすチ、長吉殿か、わしや観音様へ参つたがちそこなたに咄したい事か有チ、よこそ逢ましたサマアく爰へハテマア爰へおじやいのふ、さよならお絹さん御免なして下されやシテ咄しさいふばなアノ咄しさいふは外でもないかのそちのお半様ご長右衛門殿ごの、ハイ知てる段かいなくイヤモウござえらふ知

て居るばいなアアノナ石部の宿屋で泊つた時になエツトツトもけつたいな事を見てなやつぱり今にむねはくらく／＼ヲホー、ー、ー、チーそふである道理／＼惚てあやるお半様を寝取られたら腹が立答ア、い、へ、／＼／＼お家様／＼何のわしがお半様にア、イヤコレ隠しやんな知て居るがわしが言よふにさへしやるならそなたの戀は叶へてやるが何と談合に乗氣はないかエ、そんならアノ何かへアノお前様の言やうにすりやお半様とわたしが戀はチ、叶へてやる／＼はいのふエ、そりやマアほんまでござりますかへヤそんなら言ふかいな何じやいなアノお絹様お前様の手前もマチつくりちつご恥かしいかなアノナ有様はお半様にほホ、ー、ー、

アイ首切惚て居ますはいのふ女夫にして下さんすならごんな事でもチ、其心なら近い中こちらの内で此事を打割て山あげるサ其時そなたがそこへ出てお半はおれが女房じや伊勢参りから念ころして居るさつ、ばつて言やるこのこの長右衛門がモゴのやうにあらそふてもあの人の手へはアイわしが入ぬハテ主であらふが家來で有ふが戀に上下の隔てはない一度でも抱れて寝たと言拔ればそなたの戀も叶ふさいふものマよふ合點かいたかやへイム、成程そふじやな誰がごふ言てもおれが念ころしているさいひける事は合點じやかそふしたら大方こちらの後家様がわしを追出すで有ふぞへハテそこら案じて色事が出来るものかいの、もし追出さるゝ

に極つたらお半はおれの女房じや大きな顔して連れて出やア、い、へ、／＼申しお家様／＼運ては出られませぬわいなそりや又ごふしてサイナ連れて出ても行所がござりませぬサアそこはわしが吞込で二人ゆるり暮すほど金ばわしがつづけてやるエ、そんならアノ金を借ておくれなされませかへ是はマア／＼何から何まで大きに御世話でござります何のゆかりもない人に海山御恩の其上に又色々の御苦勞かけお金出して私が戀叶へて賜はるお慈悲心思へば／＼エ、コレマ勿体ないチ、長吉殿何のいふこれはマア當分の小遣ひさ巾着より取出す金小杉に包んで手に渡せばエ、こりや何じやいなヨチ、コリヤ金じやチお金じや／＼ハ、ー、ー、エ時に



きかれて隠居繁齊、珠數爪ぐつて奥より出で、詞ア、おば、聞辛い、死なれた隣の治兵衛殿も、五つになる迄育られた長右衛門、無理に貰ふて家の根づき、死んだ先の女房は隣への義理があるよ、あらい詞もつかはなんだに、長右衛門成人以後後妻に直つた身を持つて、連子の儀兵衛ばかりを大事にかけ、兄が事云ふことがみく、エ、ちまたしなみやれ、ヤコレ嫁女、氣にかけてたもんなご女房にかはる佛性、詞オ、その結構を見込で、財産をさ、ほうさにする長右衛門、随分可愛がらしやれ

ア、やかましやの、コレお絹隠居へ連れて居て、晝寝なごさしてたもれさ、負けて居ぬ口逆らふは、後生の邪魔と繁齊は、裏の隠居へ嫁引き連れ、行くも戻ると一時に、儀兵衛はさつかは内に入り、母者人聞かしゃれ、一昨日兄貴も取りに行かれた駿河の爲替、未金を見ぬ故、合點がゆかぬミ飛脚屋へいて問ふたれば一昨日長右衛門殿に渡したと、爲替手形を出してみせた、すりや爲替の百兩は、兄貴が宙で盗れたに極つたオ、左様であらう共左様であらう共戻りおつたら吟味して、親父殿への面當、ぐつさいがめてよい樂しみ、イヤコレ儀兵衛、今一つよい事はノウ、昨日登つた濱松の五十兩も、金戸棚の合鍵して、コレ見やちよろり盗んで置いたは、金の入るわも身にやりたさ、爲替の金をくすれたからは、これも兄めに塗付ける。出来た、母者人、コレ此五十兩はの、コ

レかうく、と囁く弟、兄長右衛門は棒鞘の一腰こしにさしつまる、難儀をなんぞ投首し、しほく歸る我が家の内、見るより母ばやんぐわん聲五丁か十丁ある屋敷に、半日の上かゝつて、内の事は何になる、朝からげい子やお山狂ひも、あんまりてうでござらうと、わめくは隠居の耳へつ、抜け、又鬼婆がしやら聲は、長右衛門が戻つたか、お絹をつれて親繁齊、詞さつきにも云ふて聞かすに、長右衛門さへ見りやかみ付く様に、近所の手前もちと思やれ、長右衛門もひだるかる、ソレお絹早う飯をおましや。イヤ飯所ぢやないぞ、問はにやならぬ事がある。コリヤ長右衛門、一昨日取りにいつた爲替の百兩、ドレ金見やう爰へ出せと、云

はれて吐胸の長右衛門。イヤ折角参つたれど、先の亭主が折悪しく留守

金は明日受取る約束。ア、コレ、コレ、兄貴、エ、ぬげ、ぬげ、ぬげ、ぬげ、嘘を云はつしやるな、已やたつた今

先へいつたれば、金はこなたに渡し、たこ、爲替手形を出して見た。がそれでもこなた受取らぬか。エアサそ

れば。アノ金は明日の約束で先へ手形はやるまいかの。兄貴、エヤ先へ

コレ儀兵衛々々詮議にや及げぬ、モウ川東へ飛んだぢやる、昨日登つた

五十兩も心元無い、サア爰へ出して見せ、あつこ云ふより長右衛門、

巾着の鍵こて、金戸棚の引出し明け、詞ヤア五十兩の爲替の金がな

い、どうした事と驚く夫、お絹も胸

り繁齋も俱に驚く呆れ顔詞オ、盗人たけ、鍵の下りた此の戸棚

鍵持つた者が出さいて、誰が取るぞいやい、ハア之もお盗み遊ばしたの

ぢやな。オ、適な家の根柢ぢや、ノウ、根柢ぢや、親父殿の安堵であらう、嫁御囃嬉しかるノウ。

イヤコレ母者、そればかりぢやないまだ、滅相な事がある

わいの、コレ隣の娘お半と兄貴が念頃して居る近所から云ひ立つれど

ア、いとしなげに兄貴に限つて、猥らなと云はうか、マおこなげないそ

んな事、よもやあるまいと思ふたがコレ、違ひない、コレ、コレ

レ此状で、エ何ぢや書きおつたな、爰らあたりから讀みかけやうか。エ、何ぢや、エ、エ口の間はこつて

退けて、伊勢参りの下向道、石部の宿の假枕、今しも忘れかれり。どうぞどうぞ今一度、ヤアノ嬉しき

御見を願ひ上げり。長さま、いるお半より、ハア、ませたり、小へ

けたれめが。ヤア、そりや大それた不義いたづら、兄弟同然と云ひ、

恩ある家の小娘をそ、なかし、嫁入の邪魔をおのれマあようしたな、コレ

親父様、なんこがみ、云ふが無理か、水昌輪の様な儀兵衛、蟲負口

でござるかや。悪は悪でも當座の理詰。長右衛門は身に冷汗、親繁齋

も胸迫り、詞、長右衛門、エ、情けない事してくれたな、色は心の外さ

云へど、モ餘り圖のない取合せで、おりや世間へ顔が出されぬ、嫁女の里へもこの顔さげ、どう挨拶の爲様



のか、乞食の子やら、盗人の子やら  
 知らぬ捨子のおのれさば違ふ素性  
 正しいこちら親子に、科を着せやう  
 とする横道者めが、サアく五十兩  
 の行先を云へ、云はぬか、云はぬさ  
 かうちやと棕櫚箒振上てりうく、  
 く、肩腰分けず打ちすえる。こり  
 やあんまりさかけ寄る、お絹箒をし  
 つかと動かせず、詞エーエー、お  
 前はなア。何さした。何さしたとは  
 エー、胸愁ぢやわいなく、いかに胤  
 腹分けぬさて、さう酷たらしうはせ  
 ぬものじやわいな、云はぬが禮儀孝  
 行なれど、お前方の氏索性も、あん  
 まりあやは脱けぬぞへ。サア云ひま  
 うせか、云はうかこ、腹立つまゝの  
 捨詞。眞面目になつた母息子、長右  
 衛門は女房を引退け、詞コリヤ母に向

ふて慮外な悪口。それでもお前。云  
 ひ止まぬか。サアくく何に云は  
 しやす、禮儀も人によるわいな、な  
 んば結構にあしらうても、かみ合せ  
 のあるか、様ぢやない。エー私や腹  
 び立つくく、身をふるはした  
 る無念泣き、心根不惑引寄せて、  
 道理ぢやくが、コリヤ親ぢやわい  
 やい、親云ふ字で何事も、虫  
 を死なす胸の中、思ひやつてくれ女  
 房さ、拳を握り男泣き、詞オ、それ  
 く、親ぢやぞ、親に向ふて何  
 の不足、コリヤ義兵衛、ちつこかは  
 つて箒の役、叩きのめして金の行衛  
 を、オ、合點と棕櫚箒、振上る手を  
 ぐつと捻上げ、詞ヤ我にはよう叩かれ  
 まい。美事兄をわりや打つか。イー  
 ヤ弟が打つのぢやないぞ、おれが

名代にごつかして、金の白状さ  
 するのぢや。いや白状も絲瓜もいら  
 ぬぞ。兄に指でもさしたらば、此繁  
 齊がうねをばいまくるぞ。コレ親父  
 殿。金を盗んだ長右衛門、何んでこ  
 なた最負する。ソレよれむ大たわけ  
 の親玉とやらぢやわい、長右衛門は  
 此の家の主人、百五十兩が千兩でも  
 我物を我が使ふが、又撒きちらさう  
 が心次第、それを盗んだと詮議立て  
 が、阿呆臭いわい、づけく物を吐かし  
 たら、昔の飯焚きお竹にをひさげ、  
 長右衛門女房が草履直さし、詞親子共  
 にぶちのめさせて貰つかはすぞと、  
 道を立てたる父親の、情に女夫は有  
 難涙、親子はふくれる焼餅顔、詞ア  
 義兵衛草臥たノウ、臺所で一ぱい  
 せうかい。オ、それがよござんしよ

コリヤ長吉め、失せい、おのれにや  
大分臺詞があるも、弱身を見せぬ親  
ご子か、後に引添ひ出来合の、つぼ  
をかぶつた色事師、打運れ勝手へ入  
る跡を、早くれか、れば下男、燈す  
八方行燈の灯、佛檀の御灯は年寄役  
ご繁齋が、こてく燈せごしめり居  
る女夫の者を膝近く、詞て年々尻  
が温もり、道も義理もしらぬげ、め  
追ひまくるも合點なれど、七十に近  
い繁齋、女房の離別が見目でもない  
ご、モ堪忍の胸をさすつて居る、し  
たご否ご云はうも應ご云はうも、近  
い内臈居へ呼び取り、母屋の事は構  
はずまい。女夫乍らそれを樂しみに  
煩らはぬ様にしてたも、又長右衛門  
も何やかや、氣の揉める事もあらう  
ご、浮世に長うも居れぬおれに逆様

事など見せてたもんな、物の譬へは  
あれアノ御燈、僅か燈心一筋でも、  
油ごの持合で燈つてある、油は繁齋  
燈心は長右衛門、暗いご云つてはか  
き立て、すり込むご云ふてはかき立  
て、段々ごかき立てく、もごきあ  
せつて燈心が無うなれば、油はあつ  
ても家は暗闇、ア其氣の細い燈心一  
本、コレ高が町人の身の上で、これ  
が恥の立つたたぬごは畢竟心が狹  
いご云ふもの、ちつご堪へて氣をか  
き立てさへせれば、いつ迄も身は有  
明行燈、遠州の御用も相變らず聞く  
様に、親に安堵を頼むごやご、く  
める様に着折り鏡、心は親身かむむ  
腰、伸して佛間に入にけり。親の意  
悲心身にこたへ、差俯向いたる夫の  
鏡、云はんごすれご胸ふさがり、し

ばし、詞も出でざりしが、コレ長右  
衛門様、道理は道理なれど、お前は  
きつうすまぬ顔ぢやが必ずひよんな  
思案やなど、怪我にも出して下さん  
すなエ、姑御や小舅につらい氣兼  
も辛抱も、お前ご云ふ人あればこそ  
十年運添ふ女房の手前、立たぬ事も  
何にもいらぬ、おやま狂ひも藝者遊  
びも、そりや殿達の器量ご云ふもの  
お牛女郎ご二人が仲、ひよつご私か  
知つたかご、言譯にさしやんす媒酌  
詞愚鈍な者でも女房ぢやご思ふての  
心づかひご、私や心で拜んでばかり  
居りました、其の返報ではなけれど  
も、縁組は變改は、年ばも行かぬあ  
の子でも、もしやお前の樂しみにな  
りませうかご心の奉公、詞私は疾う  
から知つては居れど、倍氣所か顔へ

も出さぬば、氣の毒ぢらすむ笑止な  
 こ、結構な舅御と、意地曲悪い。姑  
 御の耳へ入るゝかそれが悲しき、私  
 も女のはしぢやもの、大事の男を人  
 の花、腹も立つし、悋氣の仕様も、  
 満更知らぬでなければ共、可愛い殿御  
 に氣をもまし煽びでも出やうかと、  
 案じ過して何にも、云はずも六角堂  
 へお百度も、どうぞ夫にあかれぬ様  
 お半女郎と二人の名さへ、立たぬや  
 うに願立も、はかない女の心根を  
 不惑と思ふていつまでも、見捨す添  
 ふて下さんせと、夫の膝に打ち伏し  
 て、くゞき立てるぞいぢらしき、長  
 右衛門も目をすり赤め 詞女房共忝  
 ない、云やる事が道理だらけ、道理  
 のないおれが身一つ、さりながら百  
 兩の金を色遣ひと云ふたは嘘。そな

たの弟才次郎が、死ぬるを助けた  
 雪野が身の代。エーそればまあ。サ  
 ーサア堅う此事云ふまいと思ふた  
 れど、浮氣らしい色狂ひと思はれま  
 い爲の言譚。わが身の弟の事なれ  
 ば、惜しくは思はぬ爲替の百兩、又  
 五十兩の盗人はしつかりと知つてあ  
 れど、サア詮議をすれば不孝になる  
 此二た口の譯は立てば、面目ないは  
 お半の事、遠州よりの戻りがけ、お  
 半は長吉乳母諸共、伊勢参りの下向  
 道、石部の宿屋で泊り合せ、私は口  
 の座敷に寝て居る、お半が来て起し  
 たも、夢現に聞いて居れば、長吉が  
 参りがけより無体の懸路、明日はい  
 ぬれば今夜はこゝに泣沈む、私か  
 知つては長吉が氣の毒に思ふである  
 し、殊に又子飼の奉公人、内へいん

でも必らず母御へ告げてやりやんな  
 サア夜明も近し、乳母が傍へこ、エ  
 ーモウらちも無い事、我身ながらも  
 愛想がつき、運添ふそなたに顔上げ  
 て云ふも云はれぬ身のあやまり、美  
 くしし云ふてたもる程、おりやモ面  
 ががぶりた、堪忍してたも、こら  
 えてたも、併しこれもさつぱり埒明  
 けてしまふたれば、ごこへなりこも  
 嫁入するであらうぞいの、親父様の  
 有難い意見と云ひ、ハテ過つて憚か  
 らぬおれが身の上、何にも案じる事  
 はない、兎角これまでの事は、コレ  
 あやまつた。エーわつけもない  
 女房に何の詫、もう。此  
 事はさらりと流して又云ひ出さぬか  
 ための盃、わしや肴拵へよう。  
 一つ上つてちまお休み詞そんならさ

うせう、ア、氣くたびれか、ふらく

れむたい、其間も一睡、ヤツころり

そこける、夫にあてがふ枕蒲團打着

せ女房は、勝手へこつかは行くかけ

を蒲團の中より手を合せ、詞不所存な

長右衛門を、男と思ふて辛抱する心

いきの嬉しさ過分さ、千萬年も連添

ふて禮が云ひたい、たんのうさせた

い、取分けて五つからお世話なされ

親父様、末期の水も上ませず、逆様

事の歎きをかけるは不孝云はうか

道知らず、さつきの御意見お絹も心

底、聞けば骨身をさかる、苦しみ、

親父様の御了簡お絹の心はさばけて

しやつた治兵衛殿お石殿へ恩を仇、

其上屋敷へ持つていた正宗の差添は

マアいつすりかへりれたも知らぬ質

物、最負強いお留守居も、お國へこ

りなす詞もない、今夜四つ迄に詮議

仕出せよ、モ御了簡は付いたかど、

ごことを詮議も雲も闇、所詮生きては

言譯立たず、モ死なうと覺悟極めた

れ共、詞親父様やお絹が顔、名残に

一目に見に戻り、いよく女房に苦

に苦をかけ、不幸に不幸の覆輪かけ

る、此身は何たる大悪人、モ、

愛想もこそもつき果てた、我身の上

ご忍び泣き、枕も漂ふ涙なり、同じ

思ひを信濃屋のお半は胸の憂さ辛さ

よそ目を包む振袖の、内を覗いてよ

い首尾こそつこ這入つて枕元、詞長

右衛門様長右衛門様今朝下さんした

文の返事、ちつこ逢ひにさんじたご

ゆすり起せばさばけ顔詞フウオ、お

半か、返事に来たさは合點がいたか

成程お前のお仰有る通り得心してこ

れ切にさんと思ひ切りませう。オ、

出かしやつた、それで互の

身の納り、世間の噂もひさりやむ、

サア、其心ならこうして居るご又

浮名、ちやつこ内へ去んでたもや、

アイ、私やモこれを限りに、さつ

ぱり内へ歸りますが、お前は随分お

達者で、詞見納めに今一度顔を、よ

う見せて下さんせと抱起して顔つく  
 ぐ、見る目もあかれぬ雨やさめ、  
 長右衛門も此世の別れこ、口へ出さ  
 れど心の内、詞コレ何もきなく思  
 はすこのう、コレ煩はぬ様に、  
 母御へ孝行。アイ、今迄はよう可  
 愛むつてくださんした、禮は云はず  
 に氣を採まして。ア、やくたいもな  
 い子ぢや、死別れ、サア死別れでは  
 なし縁は切つても朝夕見る顔。ア、  
 コレ、誰も見ぬ内サア去にや  
 く、コレ去にやいのと突きやら  
 れ、名残も惜しの離れ得ぬ、衾をわ  
 けて出て行く、果は桂の川水に、浮  
 名を流すぞはかなけれ。虫も知らす

か長右衛門、詞ア、ごうやらおかし  
 い今の去にやう、合點かゆかぬと門  
 の口、落ちた一通灯かけにすかし、  
 詞書置の事、扱こそさかけ出しても  
 宵闇に、かげさへ見えぬ四つ辻を、  
 又かけ戻つて見る書置、佛壇の間に  
 繁齋も、看經の聲いつもよりも、無  
 常を誘ふ鐘の音、南無阿彌陀佛、  
 南無阿彌陀佛なむあみ。エ、讀み詞  
 おまへと縁切り外々へ嫁入りする心  
 もなく、殊に只ならぬ此身、世間へ  
 知れては私も恥は厭はれども、お前  
 の名を出すが悲しく、お絹様への詫  
 言や、か、様に叱られぬ中、桂川へ  
 身を投げ候。エ、お前は御無事で御

夫婦仲好う折々には一廻の御回向願  
 ひり、エ、ア、可愛や、突  
 詰めた娘氣で苔の花をちらさすも、  
 皆此長右衛門もなした業じやわいの  
 南無あみだく、讀み詞無ぞや、か、様  
 の歎き力落と存じ候間、江戸の兄  
 様を呼び戻し朝夕の御介抱頼み上げ  
 り。コレ、そなたが死んで  
 は猶もうて生て居られぬ長右衛門、  
 一所に死ぬが親御へ言譯、ア、如何  
 様因果は車の輪、十五年以前、宮川  
 町の藝子岸野に登り、つまらぬ事  
 桂川へ心中に出た所、先へ岸野も身  
 を投げたを、見るよりふつと死に遅  
 れ、人の知らぬを幸ひに、其塲を遁

れ今日迄は生延びしむ、思へば最期の一念にて、岸野はお半と生れかはり、塙所もかはらぬ桂川へ、我を伴ふ死出の道連れ、ホウ、これこそ因果の罪亡し、さうじやくと観念し桂川へまかけ出す。道引違へ本間五六、門口覗き相圖の手拍子、長吉勝手を忍び出で、詞兄者人大事な爰へと懐より取出す五十兩、義兵衛から請取つた約束の骨折賃、件の脇差持つてきてか。オ、さげて来たこ金に引かへ、ヤナニコリヤ長吉、おりや何にも譯を知らぬむ。此脇差はごうした代物、骨折にさへ五十兩、儀兵衛殿はよう出すの、ハテ其五十兩

も根は相鍵した盗み物、此脇差は長右衛門が遠州の殿様から請取つて来た説物、戀の敵の意趣暗し、石部の宿で摘りがへたばおれも細工、何んさよいか。よい共、それを儀兵衛はごうするつもり。サアイノウ長右衛門のうつそりが鬨共知らず研

う揃うた畜生めら、おりや幼少から大阪の水濱に奉公、母者人の咄しで聞けば親父殿はこれの御隠居繁齋様のお情けで、聚樂町で八百屋商ひ、其縁でおのれまでお世話、七つの年に信濃屋へ奉公にやつたも繁齋様、時に悪者の儀兵衛めが、鬨侍を頼みにきたは、ア、ごうでもこりや兩家の難儀の筋と推量して、悪者仲間へ遣入つたも、此謀みを聞こう爲ちやわい。其脇差は矢張贋物、正眞はコリヤおれがさして居る。ハアしまふたご、逃げ行く長吉掴み投げ、勝手をかけ出る母儀兵衛、其脇差をこ取りつくを、猪口才すなご右左、ご

つさりころり投付ければ、長吉も  
 起き立つて三人一緒に、掴みつき、  
 繁齋お絹も馳出で、様子は聞た三人  
 共、く、れ、く、云ふ聲に、こりや  
 叶はぬと三人は、行衛知れず逃げて  
 行く。隣のお石がおる、涙、コレ  
 イノウコレ、さつきにからお半が  
 居ぬ故、尋れて見れば此書置。エ、  
 と皆々胸騒ぎ、詞長右衛門様も何處  
 へぢや知らぬ、ヤア、く、く、と俄に  
 うるたへ、繁齋は氣をいらち、詞そち  
 は早う其脇差遠州の藏屋敷へ、後日  
 の言譚證據の三人、追つかけて引つ  
 く、れ、心得ましたとかけゆく五六  
 門へどや、桂の百姓、氷の淵に二  
 人の身投げ、引上げ見れば見知つた  
 顔、アノ爰な長右衛門とお半様。ヤ  
 ア、そればと皆敗亡、呆れていつ

そ涙も出でず、詞コリヤヤイコリヤ  
 男共女共も皆おぢや、く、く、氷  
 の淵も長右衛門へ身を投げたさいの  
 コリヤ、コリヤ、こちの者共も皆來  
 い、お半が長右衛門さんで長右  
 衛門が、お半様ぢやさいやい、ア、コ  
 レ、二人乍らうるたえまい  
 く、く、高の氷が淵も桂川の心中  
 ぢやと、何を云ふやら譚もなし、何  
 分早う最期場へと、百姓共に勧めら  
 れ家内の男女呼びつれ、泣きに行  
 くこそばかなけれ。



輝虎配膳の段

(り替日每奥口役)

豊竹つばめ大夫  
猿太郎改メ  
豊澤猿  
竹澤團二郎  
竹本相生大夫  
鶴澤重造  
鶴澤友駒

人形

母唐越路  
女房お衣  
女房勝衣  
直江山守  
輝虎  
甘糟  
柿崎  
字佐見

吉田玉次郎  
吉田玉太郎  
吉田文五郎  
吉田文玉  
吉田多三郎  
吉田徳助

信州川中島合戦

(床本) 輝虎配膳の段 (口)

葉公龍を好んで書き刻め苦真の天龍を見て魂を失ふ是龍を好むに非ず龍に似て龍にあらざる物を好むとははん將の賢士を好む賢に似て賢にあらず少哉、才賢の臣されば長尾輝虎信玄と初度の合戦に勝利をうしなひ本城に勢を引入れ執權直江山城守實綱、甘糟、柿崎、宇佐美なんど士大將召集め今度の軍味方三萬の人數を以て武田が一萬二千にかけ崩され無念の敗北骨髄に徹す、日頃危き勝を好まぬ信玄、朝霧のまぎれに大河を渡し切所の細道より我旗本の後ろへ押廻し無二無三にかけ破りし武略の鋭さ、信玄が胸中より出でからず、いかなる軍師か敵に組し、かゝる奇

計をなしけるぞ、汝ら聞かずや、しらすやと眉毛逆立て眼に角、以ての他なる不機嫌なり、甘糟、柿崎詞を捕へ我々も其に心付き問者を入れて窺ひ聞き候へば山本勘介暗幸と申す浪人を召抱へ、そなへ陣取士卒のかげ引き一向勘介が下知と承はるぞ申しもあへぬにムウ音に聞く勘助則ち直江が女房の兄ならずや、ヤイ山城近き縁者の身にてなぜ我には勧めず、何ぞ油断して敵にはごられし、信玄が千石くれれば二千石、三千石やらば六千石、五千石ならば一萬石もくれんす物、我家を見限りしか、但し此輝虎勘介が主に不足なるが、所存有ばいへ聞んこ顔色せいて見へける直江少も驚かず御意なく共申し上んぞ存る所かれら妹を相具し候へ

共勘介には未對面致さず在郷に引込  
 鋤鉞取てみづから耕やし秋の田面の  
 月に嘯き薪を荷ふて山路の花を友と  
 し世をへつらはす祿を貪らず天命を  
 樂しみ義を堅く守る士、越後半國賜  
 ばるさて、傳縁引を力に知行を望む  
 勘介ならず憚りながら君御短慮高慢  
 にて人に詞をさげ、へりくだる事御  
 嫌ひ世の中八分に見くだし思ふ様に  
 知行さへやらば樊噲、張良でも加へ  
 て見せんこの思召とは大きに相違、  
 今度武田方に成たるは必説信玄か上  
 手を盡して招きたるに疑なし、某  
 も餘りに残念枕をわりし一術、短氣  
 をしづめ無念を押ゆる御合點ならば  
 密々に申上ぐべしと恐るゝかたなく  
 申しければさしもの輝虎理にふくし  
 ほくくうなづき座敷をきつと見渡

せば甘糟始め物大將残らず御前を立  
 ける輝虎色を和らげ賜ひコレ實綱  
 智有る軍師を親師匠共尋ふば古への  
 法、勘介我に奉公せば弓矢八幡脚を  
 もたせても堪忍する、おごこが思案  
 は何さくさん候、勘介幼少にて  
 父に放れ七十に餘る老母に孝心深く  
 廿四孝の追加さ沙汰に乗る孝行者先  
 づ母を麗けん爲女共より迎ひを立さ  
 せ候と申す所に直江も妻の唐衣や  
 り戸口に指窺ひなふ山城殿母様先程  
 おつき、兄勘介殿のことも同様、同道  
 差圖の通りすぐに御城へ乗物入させ  
 お次のだいの間に休ませおきしと  
 聞しより輝虎出来たくつぶさに聞  
 きたし是へ御免ある近ふ参れと  
 呼出し、シテ母は年よられしか、機  
 嫌はよいかと問ければ永浪人の辛苦

にや腰は二重つむりは雪十もふけて  
 見へながら行儀作法は昔にかはらず  
 勘介殿の御かもじお勝様にも始めて  
 達しおじんじやうな氣高い婢御一  
 つの疵は口が吃りて物いふ事を恥し  
 まり請返答は皆筆さき、其うへ琴の  
 上手筆にもかくれぬ急な時はいふ事  
 にふしを付け琴にのせ、諷へばいか  
 やうの早い事も吃らずにいはるるご  
 母様の物語り、其手の見事さ、墨付  
 筆勢、御家中の祐筆衆にもすくない  
 程の器用人吃りが直してしんぜたい  
 と語れば直江一段、随分母の機嫌  
 を取りいつまでも逗留あるやうにも  
 てなせ、嘸老体のくたびれはへ請じ  
 此御座所に直して馳走、殿さ我は  
 障子のかげにて事の様子をはからひ  
 首尾を見合せ對面せんさ主従伴ひ入

りにけり。

(床本) 輝虎配膳の段(奥)

おりしも床の倭琴、硯料紙も座敷  
にならべ唐衣廊下の欄干に手をかけ  
山本勘介殿のくもじ様母御前つれま  
し是へお通り山本勘介殿のうもじ様  
母様と請待の聲聞ゆれば首高しく  
啼を出し老の鶴、子に逢ふまでぞ世  
の人のさふ共我は名なし鳥、名を洩  
さんはおこがまし、なふ唐衣此越後  
は勘介が主君信玄公の敵の國、そも  
じの夫は敵の御家老、其所へ此母が  
来る義理はなけれ共此世の名残に母  
の顔見たしこの文の面、我も娘戀し  
さむかひと打つれ、言語廻らぬ嫁を  
方に下女も連れ此有さま、山本殿勘  
介殿の母よ内義よと聲高にいはぬ事

ヤアえいご座せんぞするを手に取て  
すぐには是へご請ぜられ嫁のお勝がた  
づさへし持かたな膝に引よせおめす  
堀うてぬ白書院繻したる袴のうへ  
威も備はつて見へにける唐衣近くさ  
しよつてお禮申すはお勝様私か幸行  
をおひさりにふりかけ年寄のおき伏  
し朝夕の御介抱此度の道中雨につけ  
風につけ、山よ川よ嘸お氣づくし詞  
には申しつくされずと、いひかける  
程くちごもりたやあいにくと笑顔は  
かりをあいそにて硯引よせ、あから  
む顔の儘もみぢ、木の葉の時雨さら  
くくく世尊寺やうの走り書、よみ  
てのくせによみ安き唐衣取上げア  
く是は忝いお筆の通り姉となり  
其妹となり其兄弟と思し召お心隔す  
頼ます扱此御手跡わいの、存せぬな

から見事見事、此半ぶんごうぞ書た  
い事やとくるくくまいて袖に納むる  
後ろより直江装束改め、狂文の綾の  
吳服ひさへ肩にかけて立出、式臺ふ  
かく拙者直江山城の守實綱お國本へ  
罷り越親子の禮義申し上ぐべき所  
女共より迎ひを参らせ遠路の御光駕  
祝着是に過ず山本氏の御内室にもか  
くぞく御同道、お心やすく御逗留  
あるやうにわざと御馳走は申さず隨  
て此小袖は將軍義輝公のお召二ツ引  
龍の御紋付、主人輝虎拜領致され一  
兩度着せられしばかり、當國は寒國  
うた、れの褌に置賜は輝虎も満足  
たるべしと指出せば起直り莞爾と笑  
ひヤレく敷ならぬ此婆も來た事輝  
虎公のお耳へ入しよの、扱は爰は輝  
殿のやかたかと思へば御主人の本丸

か、シテ此小袖を婆に着よまかホウ  
 念の入った事やの、奴くく結構な  
 狂文のあやこいふ物か、さすが將軍  
 のお召れう。さりながら輝虎殿が一  
 兩度も着賜ふさあるからは輝虎の古  
 着此婆は此年まで人の古着もらふて  
 着た事がない。なふ否やいまくし  
 いと詞にあやもつやもなく吳服も色  
 をうしなへり、いや申し母御にめせ  
 こは御あいさつもこそ是ば男もやう勸  
 介殿のみやげになされよこの心ざし  
 いやくく武田信玄さいふ主持て  
 何くらからぬ勸介みやげには越後の  
 名物鮭の鹽引き、歸るさの道には木  
 曾川鮭のしらぼし、しなの梅の梅干  
 しばのよつた此顔の無事を見せるが  
 みやげじやチヤかましや、鞞殿御  
 免さ足ふみのばし、ひち枕、直江も

此に立端なく勝手に向ひ手をたゝき  
 誰ぞ参られたそまれ御時分がよし料  
 理く何をして遅なはる料理人めき  
 つぞ申し付んぞ、料理を其座のしほ  
 にして母の機嫌のあんばいかげんう  
 かひく立にける、程なく御勝手  
 よしとほのめき本膳の懸盤に色々  
 魚鳥珍物のやさい美味をさゝのへ配  
 膳の侍ひた、れつくるひ作法正しき  
 疊ざばり、御膳召上らるべしと鳥帽  
 子八分に指上てこそひかへけれ、唐  
 衣見れば主君輝虎公はつとおどろき  
 是は恐れ冥加ないさいはんせしむ  
 しさいこそあるらめこなふ母様御膳  
 くさいふ聲に起なをり座をくめば  
 管領ふうのすり足にて膳のすへぶり  
 敬ひふかく、かよいの座に手をつき  
 邊國の義御馳走も心ばかり召上られ

下さるべしとぞ仰ける老母會釋しホ  
 ウ隔心かましい狸鷹殊に仰山な神前  
 に御くらそなゆる様に鳥帽子ひた  
 れの配膳は近習衆か外様衆か常々女  
 子どもに給仕さする此ば齒はぬけ  
 る口もかけくぬぎんな給仕てはき  
 うくつてたべにくい勝手へ立てきう  
 そくめされ唐衣かはりやさありけれ  
 ばいや辭宜は却て迷惑子息山本勸介  
 殿勇さいひ智さいひ楠正成も再来  
 さもいつつべき弓取おしいかな武田  
 信玄に奉公と玉を泥になげ打、麒麟  
 をつないで犬とするごとし、か  
 る英雄の御老母直江山城内縁をもつ  
 て不思議の御出國にうごんげの咲い  
 たる悦び今日より我も母と頼み子と  
 なるしるしの盃頂戴の望み、斯申  
 すは長尾彈正の少弐輝虎孝行始めの

給仕醜膳と烏帽子を盤みに付け賜へば嫁も娘もはつこばかり覺へずかしらなをさげにける。老母膝を立て直しけらく高笑ひハア、長生すれば珍らしい事を見聞よな鎌倉の海にはしゝの角で鯉釣り、せちがの淵には麥飯で鯉をつると聞しむ越後の國には老さらばひし此ばゝを餌にして山本勘介をつりよせんこばハ、事おかしや事おかしや凡そ大將は天より請たる明命をかへりみ、正直自然の矩金をはづされば天の時地の理に叶ひ諸卒是に和しついに誠の勝利を得る惣じて物には相應あり、此は給仕には腰元めのわらはが丁度相應、鶏をさくになんぞ牛の刀を用ひんとは聖人のいましめ人をたらず偽はり表裏けふのふるまひに現は

れ本心まがつた釣針に釣るゝ勘介ではおじやらしませぬはいの、此膳部に手をもかけては恩になる輝虎殿まできたいの勘介も母敵の恩を請ては我子の針先にたるみがつく、義もなく勇もなき此膳何にせんぞすんぞ立てかけばんぐばらりと蹴かへせば、膳部亂れてひつたひたゝれ膝に味噌汁、淵をなし魚よりおごろく嫁娘ハア、ハアと膳をひやして舐れある短慮の輝虎くばつこせきあげにつくい死損ひ小袖をくるればふる着なごきさみしあまつさへ天子將軍にも給仕いたさぬ輝虎が据えたる膳を脚にかけてふみちらすぞんざい狂人同然ぞ思へどもかんにんならず敵くびはれんと重代のあつき長光二尺五寸に手をかけ賜ふを直江山城さんで出

御手にすがれば唐衣母に取付きお詫くこ心をむ何の詫言舞の主人手むかひもせず詫もせぬサア手にかゝらん、こ刀かい込み立たるぎせいチ、其喉さめん放せ直江、是々々脚をもたせてもかんにんするこの御せい言は何ぞ禮儀は爰とせいで身をもふるはして無念の涙中にうろくあによめか心せく程口まはらず拜んで廻り立つ居つせんかたなく涙かた手に琴引よせ柱を律にしらべかへゆるし賜へ老の身の力にたらぬごもりのかたわものを頼みに預けしは我夫あづかるはしうさめ、かひなく爰に捨草の露よりもろき命をやむなしくかれしはしきみを無常のけふりさなし果一人すこゝ歸るさはひるひしこつの供をしてつまには何ぞ

# 直江屋敷の段

切 豊竹古鞆太夫  
鶴澤清 六

## 人形

高田の局	吉田小兵吉
番所早使	吉田文二郎
腰元お大	吉田榮三郎
小取次撫子	吉田玉昇
山本勘助	吉田榮三
小女房お姓	桐竹紋昇
女房唐勝衣	吉田文五郎
母越路	吉田扇太郎
直江山城守	吉田玉次郎
長尾輝虎	吉田玉藏
侍尾輝	大田玉藏
腰元	大田玉藏

かたらんかはりに我命母をたすけ  
 たび賜へお慈悲そやお情さわつこさ  
 けび引捨の琴に身を投ふししづむ鬼  
 を歎く輝虎も哀れに心のたゆむを見  
 て直江追取ア、御免あるぞ女共母を  
 誘ひ我館へハア、有難しと一禮  
 にお勝が嬉しさ物いひたげに頭をふ  
 るばかり足もつかずおどりぶし情の  
 花のヤレ御所櫻 枝はゑゑつちり  
 なくゝゑつちり越後の御はんじやう  
 さいはひいさみて。

### (床本) 直江屋敷の段

日を送る北ぐにの爰にもおのが時し  
 りて是より北の古さをしたひてこ  
 そは歸る雁まして老の身のけふ歸る  
 あす歸るまこらへせいなき老母の心  
 随分なぐさめさめよ殿の仰御

家老の姑ごせ家中おもんじ、毎日  
 の進物四季草木のつくり花、屏風掛  
 物歌書物語、或はさへづる籠の鳥、  
 奥玄關の取次に所せき迄つみ重ね高  
 田の局が披露にて女房達の取さばき  
 表使の進物帳、筆をさし置く隙は  
 なし、時に信濃境の番所より早使到  
 來し今朝未明右の目は晴、左の足ち  
 んばの侍御關所を通り候故何方よ  
 り何方へ行く人さ名を尋ね候へば甲  
 州山本勘介さいふ者、御家老直江山  
 城殿の御内證へ行くま申し供の人馬  
 をお國境に殘し通られし故脇道より  
 さへぎつて先づお知らせせ申置てぞ  
 歸りける局手を打是は目出たい山本  
 勘介様さはお客人様の御座領則ち  
 奥様の兄御様申上たら囃お悦び其間  
 に腰元衆お座敷きれいに掃除仕やこ

いひ付奥に入りければ手ン手に雑巾烏  
の羽はゞきくゆるはゞきはいつ、の  
ごふつたさきばぎなふお大しつてか、  
勘介様は奥にござるお勝様のお連合  
隠れもない軍法者巧の武士なれど片  
目崎にちんばじやげなちちらばども  
り何と思やる男ばきてんで崎はおろ  
か兩方見へぬしんの闇にも夜軍の早  
業は手ばしがい一番のりにぬけめな  
いこそ笑ひける、上臺所に局お聲、  
奥さまお城へおあがり板の間へお乗  
物まはしやお供のしゆさぎめき裏  
門ひらく音して高田の局立出、是い  
づれも旦那様けさよお城にお詰な  
さるゝ御相談のこゝにて奥様も今御  
登城御夫婦御城よりおさかりなき中  
勘介様お出なさるる共必く母御様お  
勝さまへは先つきたなし、此所でお

茶上げお菓子などで御馳走いたせご  
の仰なりさいふ所に山本勘介様御出  
こ小取次の撫子が案内にて旅装束の  
立付けに膝はれちれてちんちちち、  
左りちんばに右崎、雪折れ松に星一  
つ、葉越しに見ゆる男ぶり座敷にな  
をれば女房達ふつと吹出すおかしさ  
をエヘン／＼にまぎらしてお次へ笑  
ひに立もあり、お茶小姓わくつ／＼  
／＼手をふるはして茶碗の臺こぼれ  
たゆたふばかりなり細きんをかへり  
見ぬ大丈夫、笑ふも譏るも何共なく  
そちはつぼれか山城殿の御内室から  
衣に身が来た通りさり次頼むご有け  
ればハア公用に付夫婦共に登城いま  
だ城より下かられず先づ此所御休  
息それお煙草盆、お菓子／＼ごあい  
しらふ、ム、公用ならば歸りの程も

しれまじ、山州夫婦に用はおりない  
老母の氣色以ての外この便りに驚き  
夜を日について罷り越し早く母の顔  
見たし案内頼む罷り通るさた、んご  
す、いや申、お袋様は一段ご御きげ  
んよく愛元へお越なされてより、く  
しやめ一つあそばさず御家中のもて  
はやし、毎日夜の鳥のこ敷々のお慰  
さいふ程氣づかひ、しからば女房勝  
にあひ申ぞ、いやお勝様も御機嫌よ  
ふ、お袋様のお傍に追付け御夫婦は  
おさかりに間もあるまじ、それお風  
呂いそびしやお休なさるゝためお  
枕上まじや、ハほんに氣が付かなん  
だ、お慰に御酒上まじよと寝らす  
立て入れば座敷には客人獨りまぼ  
んとして、手持わるくハテ心得ぬ屋  
敷の体母の大病十死一生只今の命も

しれずと女共も自筆の文見るより前  
 後辨へずかけ付けしに病人有るてい  
 共見へす母は一段機嫌よしとて、女  
 共にも逢はせす殊に公用に付山城が  
 夫婦連にて城へあがるは輝虎程の  
 大將も女交りに國の仕置、軍評証す  
 るでも有まじ是ぞ不審の第一ムウ  
 ムウ今氣がついた、母をおさり  
 にかけて此勸介を味方に招き取る談  
 合、鏡にかけたるこそし血をわけし  
 妹なれ共夫を持って夫のため主の爲  
 を思ふから衣めは尤至極大だはけ  
 は女房のともりめ、輝虎の智略にて  
 母を馳走し一家中尊敬するに心うば  
 はれ山城にたらし込まれ息災なる母  
 をばんじ限りこの文を以て我を釣寄  
 せ、まんま敵國の袋へ入れしよな  
 り後悔千萬一應も再應も念入れる答

の事母の生願今一度見たし拜みたし  
 ご思ふより外他念を失ひ、ふか／＼  
 さふみ出せし勸介が一生の龜忽後代  
 の笑ひ草いや／＼片時もこゝまる所  
 でなし、母をばい取、立退て鼻明せ  
 んと立あがり、見やれば奥に間敷も  
 多く案内しらす門を出て後の塀をや  
 乗べき、サア一代の難所我ためので  
 つかいが嶽ひよ鳥こへ、心の山坂ち  
 んば馬行つ戻りつ、思案最中たが知  
 らせてや女房お勝走り出、コウコウ  
 さばかりに取付まゝころを物をもいば  
 す後さまにはたま突のけかけ出る、  
 又引さめてサア、いな、んなんさウ  
 ！ウロ／＼ウ、うろたへてござ  
 つた口こそ叶はれコ、ッこなたのヨ  
 ウによん女房勝が預かつて来たから  
 は氣遣ひちやくつちやるなやんがて

ばい、ッはあちやま連てぬけて歸  
 る、ぬけて戻ると心はいへど詞には  
 ぬん／＼ぬんさばかりにて涙は聲に  
 さき立てる舌も追らぬおさかいから  
 何さうるたへ来たさは三略にたつた  
 一人の母、今を限りさいふ文に、う  
 ろたゆるお不思議か、夫のうつたゆ  
 るふみ書しは何者に頼まれた、サア  
 誰に頼まれたさいへ共更に覺へなけ  
 ればうらめしげに夫の顔に指さしし  
 ウウ嘘はいのミ泣しづむ、うそか誠  
 か其文爰に懷中せり、儕か手跡は見  
 よまなげ出せばさつさひらき見れば  
 我手跡カカカ、悲しやコツ此手むく  
 さるカツ書はせれ共筆／＼フウ筆は  
 わたしが筆さくり返し／＼よく／＼  
 見てい、そでない／＼ニイニ似せた  
 似せくさつた似せおつたやつせんさ

くして置いては置かぬと走り入をこりやまてうつけ者せんさくとは誰をせんさく、元來似せらるゝも儕あやまり物を似せるに手本がなくて似せらるゝが物じて敵の國へ入る時は擧動にも氣を付一言半句の詞をもつししみ、油斷せぬこそ男も女も武士の心かけ唐土蜀の單富が古事など、常々に聞きながらうか／＼と書ちらす故に似せられ後でせんさく、恨いふ程恥の恥エ、無念や一生敵の計略ののせられぬ晴幸、母さいふ字に心くらみ敵國へふみ込しはおのれが筆先き不覺をさらせし、それでも山本勘介が女房さばし思ふやこ、おぼこ蹴付け、ばつたさならむ片目の光り月日と星の三光の一度にさすはま身にこたへわつささけび入けるが、ア

ア淺ましきはかたの身クウ、國をはなれてけふの日迄ユ、夢にもマツ心休めず、油斷さてはナアなけれ共遠女ごごしせ、センせんじ茶の夕ぐれ雨の夜のツ、いづれ／＼度々に琴もヒイひかれず筆先の物語ホウ反古を誰も拾ひ集めて手本さはナ、なしけるぞやシイ七年さきの懷妊五月めに小さんし血のさばぎに舌ちまりムウ生れも付かぬごもりと成りフウ筆を舌にて物いひしチウ／＼思へば身の敵、是をななる物ならばグ、い、い、い、口わきをキツ切さきシイ舌の根をヒツ引出してもせめて死さまにみだの六字の名號をマ、マ、ン／＼まんろくにト、一唱へて死た、いさかきくごき身をくやみ廻らぬ舌にせきかけ／＼くりかけて吃らぬ物

は涙なり暗人を悔む身につまされ、天覽をあざむく勘介も不便宜やまし涙ぐみ先年の小さんより吃りさてそれぞ天命誰をか恨ん我も猪の難より五体不具に成たれご畜生に恨なく魂は元の勘介おこも吃りに心を屈せず始の性根をしつほさすへ誠晴幸が妻ならば勝手は知たり奥に入母にしらせ盗み出せ我は裏の罅を乗やす／＼と退べきがおこごは何さソウソウそれではこなたのニヨニヨン女房、かおんでもない事七生までも女房／＼ハア／＼カ、い、い、い、ウ、忝いか、い、い、ツ、畏つたさかけ入る今のか、い、い、はせかいのか、い、い、手本なりサア心安しかしこふぞ改めぬ旅出立ささいさみて出るすはがきのかげ人聲して勘介かへすな、むたいに歸ら

ば討留めよと十文字の鎧先照日にか  
 ややきひしめいたり、ヤ峰にさくれ  
 ゑきない事と庭にひらりとおりしも  
 露次の木履かたし、みじかき左りに  
 しつかさばきちんばにつきして兩足  
 揃への高低なし、一つの目玉に八方  
 見廻し立たる所に後を取切る片かま  
 鐘むかふよりは十文字前後一度に突  
 出せばまつかせとひらく四寸の身鐘  
 と鐘さがかつしと當つてむすんだり  
 ためらふ間もなくたぐり引、又突か  
 くる上下のをさき下段にくるさ木履  
 の齒にてはつしと踏みさめ上段につ  
 くしほ首もさめてをのべてじるさこ  
 れば、さられじ物さこらゆるを兩手  
 をかけてヤアぐつとひつたり、石  
 づきを追取のべ、二人が頭げたく  
 くしたたかにたつき付られ鐘を捨

て走り込む、組んでさめんさ無刀の  
 男大手をひるげ飛かゝる、脇の下を  
 かいくやり太股つかんでごうご打付  
 腰ぼれふまへて小膝をつけば間もす  
 きもなく七八人左右より組かゝる弓  
 手にかづいでめてに投こしめてにか  
 づいてゆんでへなげこしひつかづき  
 くもんどり打する手さゝの早業し  
 かれし男もかた息にて一度にどつこ  
 ど逃ちつたる。エ、無用の隙づいや  
 し信玄公の旗下にて討死するまで二  
 人の主を取り外の祿はくらわぬ勸介  
 馳走しつてごめにしつ、扱々揃は  
 め人の心のてりふりやさ木履かたし  
 で追かけ行く、實綱城よりかけ戻り  
 なむ三早早歸りしか曲もなし、勘介  
 當國に足をさめてもらひ度主人の懇  
 望、甲斐の國ばかりに月日の光りあ

るでもなし、片意地もよいかげん是  
 非に歸らば此實綱が首腰に付ておか  
 へりやれさ、くまなく尋呼かけした  
 ひ出にけり、奥にはため太刀音、嫂  
 小じうと互に白又ひつそげめ、うら  
 めしいお勝殿そなたの似せ文して兄  
 様を呼よせん爲書捨の反古をあつめ  
 女ご共にも隠し忍び手ならひし、い  
 くせの心づくしは夫に手柄させ度ば  
 かり兄様こそ武士の我強く共傍から  
 やはらぎ入縁者一門むつまじうする  
 が妻たる者の道、せつかく呼よせた  
 母様までばふて歸らふさや、兄様ば  
 かりが加良衣が爲にも母此首はやつ  
 ても母様ばやるまいわ、見事つれて  
 歸るかエーキウ聞へぬ、カツから衣  
 ぎもりの女、アナ／＼／＼あなづつ  
 てよふ似せ文シいたなナナ涙わこ

ばれてクウく口惜い悲しい、あづ  
きやつて来たハウはつちやま、のめ  
く捨てて歸らぬ。名残ほしくば  
首に成てお供せいとばたさ切を請な  
かし、うてばはづし、ひらけば切る  
互に命をちり共はい共もらぬ太刀  
筋、くもらぬ又、鏝音ひやく物見の  
亭障子をさつと明けて出たる老母の  
かんげせ、母様さめて下さるなご聲  
をかくれば、さめぬ出かすく切む  
すんだ其太刀兩方引なうごくなさい  
ふより早くまつさかさま我身を二つ  
の及の上兩のあばらをつらぬかれ春  
筋へ二本の切先きは朱にそみてぞ現  
はる、是はさばかり嫁娘さほうにく  
れて泣さげび家中の騒動勘介、直江  
も取てかへし輝虎も聞かけ、はだせ  
馬にてかけ付賜ひしさいある敵國の

大事の客人殊に老女、我國での落  
命他國の聞こへ難儀至極と大きに騒  
ぎ見へ賜へば勘介涙にくれなむら、  
武田信玄の家臣山本勘介といふ子を  
持、何も述懐御不足但し人に御恨は  
し候かエ、いひがいなき御最期と手  
負に力を付ければ顔ふり上て我子共  
覺へぬ事をいふよな人に恨あるなれ  
ば其人と指ちがへ死ぬるまで、しゆ  
つくはいを相手にして命をはたすば  
いではない、さつくに自らは輝虎公  
のお手討にあふ身のながらへしは命  
の外、一國の大將の手をつき敬ひ御  
配膳足にかけて蹴ちらせし其時のい  
かりの顔、思へば能く堪忍はし賜ひ  
し食は人の天なれば下人下女のすゆ  
るにも膳にむかへば禮儀あり、法に  
背く慮外ば、車ざき牛ざきにもと

さぞ無念御腹立、いつの世に忘れ賜  
ふべきお心にしたかはす、ふり切り  
歸る勘介追手をかけてからめ捕られ  
母めむにくしみ此時と逆櫛にも行な  
はれ、なぶり殺しと聞ならば此度母  
が死ぬ悔はいかばかり、坊主憎さに  
けさまで憎き世のたさへから衣まで  
いかなる憂き目にあふべきと、思へ  
ば胸をさく如く思ひ歎きて此死さま  
何に似たぞよく見よや、森の罪科  
人嫁娘の鐙刀は輝虎公のお仕置の大  
身の鐙いらぬかれ死するからは憎し  
みは是まで勘介をつゝがなく本國へ  
返し賜はれと取なし頼む直江殿扱も  
くいかに不定世界さてかくも定な  
き物よ、母ち生れば尾張の國するむ  
の國にてひさこ成り三河の國へよめ  
りして信濃の國に浪人住居今甲斐の

國に主取し爰ぞ我露の身の置き所、  
 往生所ご定めしに思ひもよらぬ越後  
 の國の士ごなるかへ定めなき人界は  
 彌陀の淨土も覺束なやご、清き眼に  
 はらく涙、たへかれて嫁娘わつこ  
 歎ふしければ勸介心も目もくらみし  
 し王のごさき輝虎もつゝむに餘る落  
 涙に目をしばたゝいておはせしむた  
 まりかれて大聲上あへなやぜひもな  
 や我も人も武士の身は打見ばかり美  
 々しく、はかなき物のうへはなし、  
 あのはしご一命を義理に捨しも武家  
 の名をおしむ不便さよ難さいひて魚  
 を取鳥あり野鷹はにつがひ雁腹の鷹  
 の子は成長の後必母の業を次ぎ淵に  
 おぐる鯉をさる、侍も其ごこくたれ  
 腹揃ふはすくなきに天晴勸介母な  
 りし、おしや非業の死をさせ、かた

んぐ哀れを見る事も輝虎故ごばか  
 りにてさしも我強き大将のそゝるに  
 袖をぞしぼらるゝ  
 ヤア何をかな追善ご指ごぬいて左  
 の手に髪つかみもさひぎばよりふ  
 つゝご切り、家の弓矢は捨す共姿は  
 發心、名をけふより改め、輝虎入道  
 謙信、切たる髪は佛にもさへげす、  
 出家の手にも渡すまじ、勸介にさら  
 する、謙信ご首取たる心是ご母の香  
 典今端の心悅ばせよ、武士の武邊は  
 めづらしからず汝ご孝行をかんじ入  
 ての餘りぞやご涙にくれてわびけれ  
 ば、有難き御情ごさひるえんにひれ  
 ふして涙肌骨をしぼりしが御心にし  
 たがばぬ恨を捨、重々の御懇情申上  
 ん詞もなし、形ご心は信玄につかへ  
 御陣に向ひ錯矢は射かけ申共せめて

の御恩報じあたまばかりは御法体の  
 御供ご同じく指添するつご抜、誓つ  
 かんですつかご切、サア今日より山  
 本勸介入道道鬼、道はみちごいふ字  
 にて母を道引菩薩の道、鬼はおにご  
 いふ字にて鬼神もひしご道鬼入道、  
 親の冥途の銭ご二つごたぶさを手  
 に持せ血にまみれし膝の上額をつけ  
 て忍び泣、母はくるしき目をひらき  
 生れ落て此年まで六ヶ國をへめぐり  
 つひに住所定まらず、丁度七十二年  
 目に西方安樂國ごいふながき住所定  
 此二ふさの切髪はよふらくげまんは  
 た天ごいすみかをさるたのしやな  
 大将にお暇ご恐れ有、嫁よ娘よ聳よ  
 子よさらばくなむあみだご兩の手  
 に二腰の刀をぬけば死出の旅、櫓に  
 のられご道急ご越路の雪ごきへにけ

り、人々はつこばかりにてなくく死骸に打かくる唐衣お勝はかきくれて、たへ入りきへ入り亂るれとみだれぬ武士の殞歎きはつきす詞はつきて互に目禮、葬禮は直江夫婦の涙のだれ、勘介夫婦が別れて歸る、姿に謙信哀れをまし、ヤレ待て暫し、母も追善信玄への家土産せん、聞ば信濃の村上也甲斐一國の鹽ぞめして人民士卒をなやまし、鹽ぞめにするぞ聞くさもししひきやうなり、謙信が軍は、鉦さき、鹽ぞめなどの勝負はせず、我越後には海有る、かひの一國の鹽に事かゝせず馬車にてつゞくべし、軍兵のせい力かたくして我と合戦せられよと信玄につたへよやかされく情ある詞のしほに身の歎涙みちくるばかりにて、お暇申武士

の情は情、あだは仇、胸を二つにおし隔てよこおりふせる甲斐がねのよはみを見せじこつ、め共、かれてかひなき枯原かげをばなれて別れ路は後にひかる、足よば車かたば車や迫らぬ舌のド、吃がつきせぬ名残、筆にかゝれす諷はれず、泣つ、ささんつ足もごもる身もごもる、あゆみかねれば力を付け引立ひかれてコッコい、いッ心をのこしてカゝカゝカシ歸りけり。

享保六年八月の竹本座上演近松門左衛門の作、武田勝頼と長尾景虎の女衛門姫との情事の原因で甲越兩雄間に戦端が開かれる山本勘介は武田信玄の三顧の禮に感じて桔梗原の茅屋を出でてその軍師となる。景虎その臣直江山城と山本勘介との姻戚關係を利用し勘介の老母を迎として勘介を招かん苦肉の策をめぐらす次第を一篇の山さなし兩雄の和睦に終げる。



梅川めいど  
忠兵衛冥途の飛脚

淡路町龜屋の段

淡路町の段  
新町封印切の段

親里へ立寄りしが茲にも捕手の追つて、苦しき親子の生別、積る因果の雪道を遁れて死出の門に立つ情炎紅蓮の好箇の世話物。

(床本) 淡路町の段

竹本南部太夫  
野澤呂太夫  
豊澤大叶

人形

若馬侍宰下	龜屋忠兵衛	丹波屋八右衛門	番頭伊兵衛	母妙か入
い甚	ま	ん	ん	ん
者子内領人	吉田光三	吉田榮藏	吉田玉藏	桐竹政龜
大	吉田榮之助	吉田多三郎	吉田玉德	
び				
い				

この淨瑠璃は正徳元年(二百二十一年前)竹本座の初演と傳へられてゐます、大阪淡路町の飛脚宿龜屋の養子忠兵衛が新町の榎屋の梅川に馴染み、金に窮して苦心を重ねる、新町の揚屋で友達の八右衛門が忠兵衛の隘口を言ふを聞いて前後なく、忠兵衛はさるお屋敷へ屈ける爲替金の封印を切り梅川を身請けして今日に迫つた身の破滅、共に遁れてくれと廓を出る、新町の段は土佐大夫の十八番の粹であります。梅川を連れて死出の旅路にたゞ一目と目と大和新口村の

身をつくし、難波に咲や此花の里は三筋に町の名も佐渡と越後の合の手を通ふ千鳥の淡路町、龜屋の世繼忠兵衛、今年廿のうへはまだ四年以前に大和より敷金もつて鬘子分後家妙閑の介抱ゆへ、商ひ巧者駄荷積江戸へも上下三度笠、茶の湯俳諧、碁双六、のべに書く手の角取で、酒も三つ四ついつ所紋羽二重も出すゐらず無地の丸鏝象眼の國細工にはまれ男色の譚しり里知て暮るを待す飛足の飛脚宿のいそがしき、荷を進るやら

ほごくやら、手代は帳面、算盤を、奥口にもござやくと、千萬兩のやりくりもつくし東の取りやりも居ながら金の自由さは一步小判や白銀に翹の有が如くなり、町廻りの状取立ち歸つてそれく留帳付る所へ誰頼もふ、忠兵衛宿に居やるかと案内するは出入の屋敷の侍、千代共慇懃にヤア是は甚内様、忠兵衛は留守なれば、お下しもの御用ならば、私に仰聞られませ、お茶もておじやさあいしらふ、イヤく下りの用はなし、江戸若旦那より御状がきたコレお聞きやれと押開き來月二日出の三度に、金子三百兩差登せ申へく候九日十日兩日の内、其地龜屋忠兵衛方より右三百兩受取内々申置候事共埒明け申へく候、即ち飛脚の請取證

文此度登せ候間、金子受取次第此證文忠兵衛に渡し申さるべく候、コレ此通り仰せ下された、今日まで届けぬ故大事の御用の手筈が違ふ、ナゼか様に不埒なご鼻をしかめていひければハ、御尤く去りながら此中の雨續き川々に水が出ますれば、道中に日が込金の届かぬのみならず、手前も大分の損銀、もし盜賊が切り取か、道からふつと出來心、萬々貫目取れても十八軒の飛脚宿から辨へ、芥子程も御損かけませぬお氣遣ひあらねなご、言せも果す、これさくいふまでもない御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ、日限延ては御用の間が明により、それ故の詮索、迎ひ飛脚を遣して早速に持参せいで、かち若徒も刀の威光、銀拵へもうさんなる

なまりちらして歸りしが、又頼みませふく中之島丹波屋八右衛門から來ました、江戸小船町米問屋の爲替銀、添状は届いたが銀はナゼ届きませぬ此中文を進せても返事もござらず、使をやらば酔のこんにやくのこいつ届けさつしやるぞ、此者に渡して人を付て下され手形戻すぞ申さる、サア金子受取ふと立ちばたがつてわめきける、主思ひの手代の伊兵衛騒がぬ体にてコレお使、八右衛門様が其やうに理屈くさい口上は有まい五千兩七千兩、人の金を預て百廿里を家にし、江戸大阪を廣ふせほうする龜屋、そ一軒では有まいし運い事もなふては、今でも旦那歸られたらば此方から返事せふ、五十兩に足ぬ金あたかしましたういふまいと、か

さから出れば、氣を吞まれ、使はましめに歸りけり、母妙閑は炬燵の傍に放るゝ事も納戸を出、ヤア今のは何ぞ、丹波屋の金の届いたは慥か十日も以前の事、ナゼ忠兵衛は渡さぬの今朝から二軒三軒の、金の催促聞てゐる、親父の代からこの家に一步の催促得ず終に仲間へ難儀をかけす、十八軒の飛脚屋の鏡と言れた此龜屋皆ば心も付ぬか、忠兵衛が此頃の素振り、ごふも吞込ぬ、昨日、今日の者は知るまいが、じたい是の實子でなし元は大和新口村、勝木孫右衛門さいふ大百姓の一人子、母御せはお死にやつて、繼母がりのわざくれ(やけ)に、悪性、狂ひも出来るぞと爺御せの思案で、是の世取に貰ひしお、世帯廻り商賣事、何に愚はなけ

れ共、此頃はそばへ何も手に付ぬと見た、異見のしたい事あれど養子の母も繼母も同然と思はふがせはくいふより言はぬ身を恥いらせふと思ふて目をねぶつても聞所、見所は見て居る、いつのまにやら太氣になり、のべの鼻紙二枚三枚、手に當り次第重ねながらに鼻かみやる、過行れし親父の咄しに、鼻紙びんびん遺ふものは曲者じやと言れたが、忠兵衛が内を出さまにのべ三折宛入て出て何程鼻をかむやら戻りには一枚も残らぬ、身も達者なの、若いのも、あの様に鼻かんでば、ごこそで病ひも出ませふごよまい事して入れれば、丁稚小物も笑止かり、早ふ歸つて下されかしご待つ日も西の戻り足店さし頃に成にけり、籠の鳥なる

梅川にこまれて通ふ里雀忠兵衛はさぼくこの外の工面、内の首尾、心は蜘蛛手かく縄や十文色も出てくるは、南無三寶日が暮るご足を空に立歸り門口に着けれ共留守の内に方々の、催促使妙閑の耳に入てはか様の首尾になつたも氣遣はし誰ぞ出よかし内證を、さくご聞て入たしご我家ながら敷居高く、内を覗けば飲焚のまんが酒やへ行體なり、きやつは木で鼻もぎごぶ者、只はいふまじ、濡かけてだまして聞んご思案する間によいさ出る、樽持た手を、しかごしむれば、アレ旦那様のご聲立る、ア、かしましいコリヤ粹めおれが首丈なづんで居る、思ひ内であれば色外に現はるゝ、目付をそちも見て取たかかばひらしい顔付で、氣の毒がらす

はごふじやいやい、いつそ殺せと抱付ばム、嘘付んせ、毎日く新町通ひ、のべ鼻紙二折、三折、結構な鼻をかまんとす物、何のわしらに手鼻もかみたふ有まい、アノ嘘つきがご振切るを、又抱付て、そちに嘘ついて何の徳、コリヤ實じやくさいひければそれが定なら晩に寢床へござんすか、ウ、成程く、忝いそれに付て今ちよつと問事有と云けれ共それも寢所でしつぼりと聞きませふ、コレ必ずだましにさすなへ、そんならわしはお湯わかして腰湯して待ますさいひ捨、ふつきり走りけり、忠兵衛は嘘腹の立煩ひて居る所に北の町からいかつげにくるは誰じや、ヤア中之島の八右衛門、きやつにあふてはむつかしと東の方へ出違へば是

忠兵衛はづすまいくご聲かけられヤ八右衛門、此中は久しい昨日も今日も一昨日も、人やるくご思ふて何やかやと延引した、めつきりご寒いか親父の疝氣は、ば様の虫歯はアいかふ酒くさい過しやるなく明日は早々人やらふやれそが言傳したぞや、近日一座いたしたいさたくしかくれれば八右衛門、ア、おけやい、口三昧に乗かけても、乗よふな男でない、コリヤそちが商賣は三度でないか、身が方へ登つた江戸爲替の五十兩は何として届けぬ、五日三日は了簡も有ぞかし、心安いは格別、高駄賃かくからは大事の家職十日に餘れご埒明すけふも使をやつたれば手代めが倍高な返事した、よもや脇へはそふも有まい、八右衛門をなぶる

か、北濱、鞆、中之島、天満の市の側まで親父共言る、八右衛門、なぶつて能ばなぶられふが金はけふ請取る但し仲間へこさよふか、先お袋に逢ふと、内へ入を引留め、さりこては誤つた、コレ手を合はすたつた一言聞ても、拜むくご囁けば、又口先で濟そふや、梅川をだましたご男の意氣は違ふそよ、いふ事有ばサア聞ふと、苦々しくきめ付られ、コレ其聲を母が聞ば死でも一分立ぬ事一生の御恩そさりさとは面目ないごはらくご泣けるが、何を隠そふ此金は十日以前に登りしが、知ての通り梅川の田舎客金すくめに、張合かける。此方は母手代の目を忍んでわづか二百目三百目のへつり金、追討されて生た心もせぬ所に、受出す

談合極つて手を打ぬばかりさといふ、川が歎き我らが一分、既に心中する筈で、互の咽へ脇差のひいやりさまでしたれ共、死ぬ時節か色々の邪魔ついで、其夜は泣て引別れ、明れば當月十二日そなたへ渡る江戸金むふらりと登るをなになしに、懐に押込で新町までいつさんに、ごふ飛だやら、覺へばこそ、段々宿を頼んで田舎客の談合やふらせこつちへ根引の談合しめ、彼五十兩手附に渡しまんまご川を取りさめしも、八右衛門さいふ男を友達に持し故こ、心中では朝晩に北に向ひて拜むぞや、さりなわらいかに懇なればこそ、先に斷り立置て、遣へば借も同然、後ではいかいと思ふ内其方からは催促、嘘に嘘も重つて初手の誠も虚言

さなれば、今何を言ても誠に思はれじされ共遅ふて四五日中外の金も登る筈、いかよふ共しななくつて、一錢、一字損かけまじ、此忠兵衛を人と思へば腹も立つ、犬の命を助けたと思ふて了簡頼み入る、是を思へば世の中にお仕置者の絶ぬも道理、此上は忠兵衛も盜せふより外はなし、男の口からかやうの事言れふものか推量有れ咽より劔をばくこても是程には有まじこしほり泣にぞ泣居たる鬼共組ん八右衛門ほろりつこ涙ぐみ言憎い事よふ言た、丹波屋八右衛門男ちや了簡して、待てやる、首尾よふせよと言ければ忠兵衛土に額を付け忝い、爺二人母三人親は五人持たれ共其恩よりは八右衛門貴殿の御恩は忘れぬこ、さかふは涙げか

りなり、そふ思へば満足、サア人も見る其内と立別れんこせし所に、内より母の聲さしてヤア八右衛門様か忠兵衛是へ通しませうと聲かけられ、詮方なくもち、連立入にけり母は律義一遍に先程はお使又御自身のお出、御尤く是あなたの金の届いたば十日も以前、何さして延引ぞ胸にさつくさ手を置てよふ思案して見や、遅ふ届けば飛脚は入らぬ、何がそなたの商賣ぞ、サ今渡して上げましや、さいへ共渡す金はなし、八右よりも底意は聞く。やはお袋、恥しながら八右衛門、五十兩や七十兩急に入る事なし、是より直に長堀まで参れば明日でも立立んさすれば、いや、大事のお金預かれば氣遣ひで夜も寝られず、ノフ忠兵衛、きり

く渡しやせり立られ、あつさい  
ふより納戸に入りうるくしても金  
はなし、入もせぬ戸棚の綻、明ける  
顔してびんさいふ鍵の手前も恥かし  
く、胸に願立て、神おろし狂氣の如  
く氣をもみしが、ヤレ有難や此櫛箱  
に焼物のびん水入れは氏神さ三度戴  
き紙押ひろげ、くるくとするが包  
みに手ばしかく、金五十兩墨黒々に  
似せも似せたり五十ばい、母には一  
ばい參らせし其惡智惠で勿体なき、  
コレく八右衛門殿今渡さいでも濟  
金ながら母の心休める爲男を立つる  
そなたさ見て、詮方のふて渡す金、  
さつぱり受取て母の心を休めてた  
も、包みは解にも及ぶまじ、いらふ  
て見ても五十兩、ごふしてたもるこ  
差出す八右衛門手に取て、ハテ誰ぞ

と思ふ、丹波屋の八右衛門、受取に  
仔細はない、コレお袋、江戸爲替體  
に受取ました、不動參りに待ますこ  
たざるめいんきさ、おも、  
立所を妙閑誠と思ひてや、是忠兵衛  
仕切爲替の作法は金さ手形さ引かへ  
もし御持參なきならば、一筆ちよつ  
さ書せましや、物は念じやさいひけ  
れば、チ、それく母は無筆の一文  
字は讀れ共しるしばかりに一筆さ硯  
出して目配せすれば安い事、忠兵  
衛文言は見やさ筆に任せて書きうら  
す一つ金子五十兩受取申さず候、右  
約束の通り晚には廓で呑みかけ、我  
らは暫間、實正明白也、何時なり共  
騒ぎの節きつと參上申べく候、依て  
紋日の爲びん水入れ件の如しと、あ  
ほうのたらく書ちらし、さらばお  
眼申そふと、表へ出れば妙閑は、書

たものこそものいへど又欺されし正  
直の親の心や佛の顔も、三度飛脚の  
江戸の左右待夜も漸々更にけり、表  
に馬の鈴の音コリヤく駄荷が付た  
ぞ中戸くさ聲高にてん手につら  
かたげこむ、忠兵衛親子機嫌よくサ  
ア拍子が直つた來年も仕合せ、馬、  
馬士衆に酒よ煙草よさ硯控へつ帳つ  
けて家内さんご、賑はへば、手代の  
伊兵衛けふさげに、ノウウ状が登つた  
何さておそいとお侍の甚内殿かれ  
めつけて歸られた、何さくさいひ  
ければさいりやう打かいより其三百  
兩合點これ急々の御用今夜中にお届  
け方くの爲替金高八百兩ぐはらり  
くご取出す忠兵衛いよく勢に強  
く白銀は内藏へ、金子は月棚へ母者  
人わたしたは直に此小判お屋敷へ持參

新町封印切の段

切 竹本土佐大夫

野澤吉兵衛

人形

女郎	鳴戸瀬	吉田文之助
女郎	千代戸瀬	桐竹紋太郎
井筒屋	女房	吉田小兵吉
禿梅	里	桐竹紋司
丹波屋	八右衛門	吉田玉藏
龜屋	忠兵衛	吉田榮三
大鼓持	五兵衛	吉田玉昇
下女	り	吉田兵次
下女	た	吉田萬次郎
傾城	梅川	吉田文五郎

する、人の銀子を預れば表も氣を付け早ふしめ、火の用心が第一、戻りはちつと遅ふても駕で行ば氣つかひない、夜食仕舞て早寝よこ、金懷中に羽織の紐、結ぶ、霜夜の門の口、出馴し足のくせになり心は北へ行くくさ思ひながらも身は南西横堀をうかくさ氣にしみ付し米も事、米屋町まで歩み來て、ヤア是はしたり堂島のおやしきへ行答、狐も化すか南無三寶と引返しか、ム、我知す爰まで來たは、梅川も用有て氏神のお誘ひ、ちよつと寄て顔見てから立歸つては、イヤ大事、此金持てば遣ひたからふ、おいてくれふか、往てのけふか、エ行もせいと、一度は思案二度は不思議、三度飛脚戻れば、合せて六道の迷途の飛脚と。

新町封印切の段

ゑひくくく鳥もな鳥もな、うはき鳥も、月夜も闇も、首尾を求めてなあなふくさ、青編笠の、紅葉して、炭火ほのめく夕アまで思ひくく戀風や、戀も哀は種ひみつ梅かんべしく松高き位は、よしや引しめて哀深きは見せ女郎、さらさ禿むしるべして、橋がかけたや佐波屋町、越後は女主とて、立寄よれも氣兼せず、底意残さぬ戀の淵身の浮しほど梅川も爰を思ひの定宿と、余所の勤も柿の本嶋屋をちよつと鳴むくれ、申し、きよ様けふは、嶋屋で彼田舎のうてずに、せびらかされて、つぶりむいたい、忠様はまだ見へぬかへせめての由縁にこなさんの顔を見た

さにかしに來たさ、入さの門の障子戸も明るあしたの筐かや、扱もよふござんした、アレ二階にも女郎さん達が大勢遊びにござんして、お客待間の、さめ言、けんをしてござんするこなさんも氣晴らしに一けんして酒一つ、傍輩さんもござんすと、上る二階の透間風男ませずの火鉢酒、けんの手品もた聞く、六ま七さい、十らい三な、同じ事さよ豊川に聲の高瀬かさすらひなにはばま三きう五六すむゐ、それ／＼なんごじたひ一つはなるさせさま、あれ梅川様のござんした、だふよい所へ來て下んした、こなさん、けんの上手宵から千代歳様に、しつけられて、無念な敵下て下さんせ、銚子直しやさいひければア、うたての酒や、けんを

する氣も有ばこそ、此梅川が今の身を少しは泣て貰ひたい、田舎の客が身請の事けふもけふまで鳴屋にて、理屈を詰てれだれ事、腹が立つら憎いやら、さば言ながら是は先、忠兵衛様は後手と言ひ宿の精力一つにて手付も渡し約束の日切きれにも言延し、けふまではつなわれし忠様もせたい持、養子の母御の手前さいひ屋敷方歴々の町方を引受て東路かけての大事の商賣いかなる事か邪覺になる、田舎の客に請られては、我身一つは死でものけふ、天神大夫の身でもなし、さもししい金に氣がふれた見世女郎の淺間しさと、世間のさなへ傍輩のかもん殿を始めとして、格子女郎衆の手前もあり、忠様も本意を遂げ、さやかふ人に諷はれし、面

がぬぎたふござんすと、泣しみづきて語るにぞ、一座の女郎身の上と思ひ合せて尤も、連て涙を流せしがア、いかに氣がめいる、わつさりこ淨瑠璃にせまいか、禿共ちよつこ往て竹本頼母様かつておじやイヤ先に鬘附買とて聞きましたか芝居から直に越後町の扇屋へいかんしたげな、私は頼母様の弟子なれば、よふ似た所を聞かせサア三味線と、夕霧のむかしを今に引かけて、傾城に誠なしと世の人の申せ共それはみないが事、譯しらすの詞をや、誠も嘘も元一つ、たさへば命投打いかに誠を盡しても男の方より便りなくさふざかる其時は、心やたけに、思ひても、かふした身なれば儘ならず、おのづから、思はぬ花の根引に合、かけし

誓も嘘となり、又初より偽りの勤ばかりに逢人もたへず、重なる色衣、ついのよるべさ、なる時は初の嘘も皆誠さかく、只戀路には偽りもなく誠もなし、縁の有のも誠そや、逢事叶はぬ男をば思ひく、思ひがつもり、思ひさめにもさむるもの、つらや所在に恨むらん、恨まばうらめいさしいさいふ此病勤する身の持病かこ、戀に浮世を投首の酒も、しらけてさめにけり、中の嶋の八右衛門九軒の方より淨るり聞付けヤア皆知つたよれの聲々、花車内にかこつゝこ入る、柄差箒逆手に取二階の下から板敷をくはたゝと突き鳴し女郎衆余りじやは、爰にも人が聞てゐる、いかなる男で、それ程に戀しいぞ、男もなふて淋しくば、お氣には

入らずさ是にも一人借てやるかこわめきける。梅川はそれ共しらすテモ逢たいが定じやもの、憎いなら来て叩んせ、きよ様下なは誰様じや、イヤ上事ござんせぬ、中の嶋の八様ご聞より梅川はつこして、是々あの様には逢さもない、皆様おつて下さんせ、私か二階に居る事を必ず言まいぞ、そこらは粹ぢやと打黙頭き皆々、座敷に出ればヤア千代とせ様なるこそ様、歴々の御參會梅川殿は宵の口嶋屋を貰ふていなれたげな忠兵衛もまだ見へそもない、コレ花車爰へ寄しやれ、女郎衆も禿共も忠兵衛が事に付耳打つて置事がある、爰へくそひそくすればハア、何事やら氣遣ひなご、思へど二階の梅川に悪い噂も聞かせんかご皆氣を配

る折ふしに、忠兵衛は世を忍ぶ心の水三百兩身も懐もいはゆる夜に越後屋に走り付き内を覗けば八右衛門横座をしめて、我評判、はつと驚き立ち聞す、二階には梅川が心をすます壁に耳もるゝぞ仇の初なる、斯ご知られば八右衛門、コレかふいへば忠兵衛を憎みそれむ様なれど、あの男が身のなる果が可愛、尤千兩二千兩、人の金をこごづかり暫しの宿を貸れ共、手金さいふては家屋敷数家にかけて十五貫目、廿目に足ぬ身代大和の親が長者でも、龜屋へ養子にこそからはモ高の知れた百姓、かふいふ此八右衛門も若い者の習ひ、一年に五百目壹貫目モ揚屋の座敷も踏ればならぬ、身にも應ぜぬ忠兵衛が梅川に登り詰め、嶋屋の客と強合、

五月より此方の揚づめ、身請も此頃極り、百六十兩の内五十兩手附渡し  
たげな、それ故に方々の届け金が不  
埒になり、當る所が嘯八百いがふ鎗  
が詰つて来た、今でも梅川が請け出  
さる、に極らば、借錢も有ふし、泣  
ても二百五十兩天から降ふか、地か  
らわかふか、盗せふより外はない、  
彼手付の五十兩どこから出たと思し  
召す、身が方へ来る江戸爲替宙で取  
て遣ふたを、それ共知らず乞に行  
養子の母御がア、いさしはや、登つ  
た金は知て成渡せ、くこせつかれて  
忠兵衛が戻した小判ドレお目につ  
ふかこ一包み取出し、コレかふ見た  
所は五十兩、さらば正体現はして獄  
門の種御覽有と、包を切て切りほご  
けば焼物の鬘水入、主も一座の女郎

もハア、いさばかりにこはげ立ち身  
をちむれば、二階には顔を疊に摺  
付けて、聲を隠して泣居たり、短氣  
は損氣の忠兵衛、傾城は苦界物、五  
十兩の目くさり金取かへたせんしや  
う、若い者に恥か、せ、川が聞たら  
死たかる、懐の三百兩、五十兩引  
抜て頬へぶち付け存分言我身の一分  
川が面目、す、いでやらふ、ア、さ  
れ共是は武士の金、殊に急用、愛が  
大事の堪忍と手を懐へ幾度か、こ  
やせんかくやしやうげ鳥いすかの贅  
の喰違ふ、心を知らぬぞ是非もなき  
八右衛門水入れ取上げ、コレ是も買  
ば、十八文いかに相場が安いとて、  
五十兩を貳分五厘かへ神武以來ない  
事、友達さへ是なれば、他人をかた  
るは御推量、此次段々に巾着切りか

ら家尻切、果は首切、ヤモいかにし  
ても笑止な、あの如くに亂れては、  
主親の勘當も、釋迦達磨の意見でも  
聖徳太子が直に教化なされてもいか  
なく直らぬ、曲輪で此沙汰ばつこ  
して寄付ぬ様に頼みます、梅川殿へ  
も吹込んで此方から挨拶切り、鳴屋  
の春にさらりつと、請け出させて、  
仕舞たい、皆あの流が心中か、女郎  
の衣裳を盗むか、ろくな事は出かさ  
ず、片小鬘剃こぼたれ、大門口にさ  
らされ友達の一分捨さする、人でな  
しとばあれが事ヤコレ可愛くば寄付  
て下さるなご、語るを聞けば、梅川  
も悲しいご、いさしいご、身のほか  
なきをかきませて、胸引さける忍び  
泣、ア、及物かな、はさみでも、舌  
を切ても、死たいさもだへ伏たる苦

しみを下には各々、推量して、ひよんな心にならんしたかたの悪い梅川さま、いごしほいは川さまお一人に留めた、ご下女料理人裏若き禿も袖をしぼりけり、忠兵衛元來悪い虫押へ兼てすんぞ出、八右衛門が膝にむんすぞ居かゝり、是丹波屋八右衛門殿常々の口程有て、チ、男じや見事じや、三人寄げ公男、忠兵衛が身代の棚おろししてくれる、忝いわい。コリヤ此水入も男同士母の心を休る爲受取てくれるかごなぞをかけて渡したを、此忠兵衛が五十兩損かけふかご氣遣ひさに曲輪三界披露して、男の一分捨さすのか、但し又嶋屋の客に賄賂取て、梅川にわらを焚あちらへやらふご言事が置てくれ、氣遣ひすな、五十兩や百兩、友達に損

かける忠兵衛ではござらぬくわいの、八右衛門様、八右衛門奴サア金渡す手形渡せと、金取出し包みをこかんぞする所を、八右衛門押へてこりや、く、待やい忠兵衛、よつ程のたはけを盡せ、其心を知つた故意見をしても聞まじと、曲輪の衆を頼んでこちらから、よけて、貰ふたらば根性も取直し人間にもならふかごコリヤコレ男づくの念頭だけ、コリヤ五十兩がおしければ母者の前でいふはいやい、てんがうな手形を書、無筆の母者をなだめたが、是でも八右衛門がごいかぬか、其金がさも三百兩、手金の有ふ様もなし、定めてごこの仕切金、其金を疵を付け八右衛門を仕た様にコリヤ髪水入では濟まいぞよ、但し替りに首やるか、登

詰る其手間で届ける所へ届けて仕まへ、エ、性根のすはらぬ氣遣ひめとわつづくごいつ呵れ共、いやく仁義立置てくれ、此金を他所のこは、此忠兵衛が三百兩持つまい物か女郎衆の前さかい身代を見立てられ猶かやされば一分立ぬと、包みほごいて十、サ、三十しく詰らぬ五十兩くるくご引包み、コレ龜屋忠兵衛が人に損をかけぬ證據サア受取れご投付る、エ、男の頬へ何とするぞへ、忝いご禮いふて返し直せご投げ戻す、儂に何の禮いはふと、又投付つ投かへし、腕まくりしてごしみ合ふ、梅川涙にくれながら梯子かけをり、なふすつきりわしが聞きました、皆嶋八様のがお道理じや、是は手を合はせる、梅川に赦して下

さんせ、と聲を上げて泣きけるが、情けなや忠兵衛様なぞ其様に登らんすそもや曲輪へくる人の醫持餘る長者でも金につまるは有ならひ爰の恥は恥ならず何を當に人の金封を切てまきちらし詮議にあふて牢櫃の繩かゝるのさ、いふ恥さ此恥さかへらるか恥かくばかり梅川は何さなれさいふ事ぞ、とつくこ心を落し付、八様に訛言し金をつかれて其主へ早ふ屈けて下さんせ、わしを人手にやりさもない。それは此身も同じ事、身一つ捨ると思ふたち皆胸に込て居る年さてもマア二年下宮嶋へも身をしきり大阪の濱に立つてもこな様一人は養ふて男に愛目はかけまいもの、氣を鎮めてくださんせ、淺間しい氣にならんした。斯は誰した、わしがした

皆梅川が故なれば、忝いやらいごしいやら、心を推して下さんせさくごき立く小判の上にはらく涙は井出の山吹に露置きそふが如くなり、忠兵衛氣も有頂天前後くくらぬ間にあい庭式金のこご思ひ出し、ハテやかましい、此の忠兵衛をそれ程たはげと思やるか、此金は氣遣ひない、八右衛門も知て居る、養子に來る時大和から敷金に持て來て、餘所へ預て置た金、身請けの爲に取戻した、コレ花車爰へ呼寄せ先へ手付に五十兩今百十兩合せて百六十兩是川が身の代、是又四十五兩いつぞやしめた帳面買ひりの借錢五兩は遣手、九月からの揚錢萬事十五兩程と覺へたが、算用がやかましい廿兩で帳消や此十兩はこなたへ御祝儀や

ら、骨折分、りんも玉も五兵衛も一兩宛じやこいぐと金銀ふらす郡那の夢の間の榮耀なりサア今の間に埒明け今宵中に出る様に、頼むぐと言ければ主し俄に勇をなし、ない程はないも金ある段には有ものかは、氣を死そふ事ではない、川様嬉しう思はんしよ、ヤ大事の金を持て行りんも玉も供しやと引連走り出にけり、八右衛門も濟ぬ顔、誠さは思はれ共、たいさへ貰ふ此小判、かやすものをいばれぬぢぎ、五十兩體に受取た、手形かやすと投出し、梅川殿へ、よい男持てお仕合せ、よれ様達是にこ金懐中し出ければわしらもいざ歸りましよ、川さま目出たふござんすこ、皆宿々へぞ歸りける、忠兵衛は氣をせいて花車はばなせおそい

ぞ、五兵衛いつてせいでくれど立に  
 立つてせきければ、イヤ身請の衆は  
 親方が濟でから宿老殿で判を消し月  
 行司から札取られれば大門が出られ  
 せぬ、まちつと障り入ませぬ、そこ  
 らを早ふこりや頼むと又一兩投げ出  
 す、おつとまかせと足かろく走る三  
 里の灸よりも小判の利ぞこたへける  
 サア、此間に身拵へ、べた、くし  
 た取なり、帯もきり、さ仕なをしや  
 さめつたにせけば、何ぞいの、一代  
 の外聞傍輩衆へも、盃事、暇乞も譯  
 よふして、ゆるりさ出して下さんせ  
 と、何心なく勇顔、男わつと泣出し  
 いさしや何にも知るか、今の小判は堂  
 嶋のお屋敷の急用金此金をちらうし  
 ては身の大事は知れた事、随分こら  
 へて見つれ共、友女郎の真中で可愛

男が恥辱を取、そなたの心の無念さ  
 を、晴したいと思ふより、ふつと、  
 金に手をかけて、もふ引れぬは男の  
 役、斯なる因果と思ふても、八右  
 衛門も頼付直に母にぬかす顔、十八  
 軒の仲間から詮議に来るは今の事、  
 地獄の上の一足飛、さんでたもやこ  
 ばかりにて、縄り付て泣ければ梅川  
 はつと振り出し聲も涙もわな、くさ  
 それ見さんせ、常々にいしは愛のこ  
 と、なげに命が惜いぞ、二人死れば  
 本望、今こそ安い事、分別すへて  
 下さんせ、なふ、ヤレ命生ふと思ふ  
 て、此大事がなるものか、生らる、  
 だけ添る、だけ高は死ると覺悟しや  
 ア、そふじや、生らる、だけ此世で  
 添はふ、ア、ほんに忘れた、わしは  
 大事の守りを内の箆筒に置いて来た、

是がほしいと言ければ、ハテかゝる  
 悪事を仕出かして、いかなる守りの  
 力にも此科が通れぬか、さかく死身  
 と合點して、我はそなたの回向せん  
 そなたは此忠兵衛が回向を頼と泣け  
 れば、梅川ひしと抱き付むせかへつ  
 てぞ歎きける、越後主従立歸り、サ  
 ア、何處まかも埒明だ、お出の勝  
 手、近ければ西口へ札が廻つたさ、  
 いへ共、夫婦はわな、くささらば  
 くもふるひ聲、お寒そふなが酒は  
 いの、酒も咽喉を通りませぬ、めで  
 たいと申そふか、お名残りおしいと  
 申そふさ、千日言ても盡ぬ事、其千  
 日がめいわくさ夕昔鳥にわかれ行く  
 榮耀榮華も人の金、果は砂場を打過  
 ぎて後は野さなれ大和路や足にまか  
 せて、出て行く。



敷島原につこめする身は何人ごふし  
 見の墨染、煩惱菩提の撞木町よりな  
 には四筋に通ひ木辻にかむるだちか  
 ら室の早咲、それむほんに色ぢや一  
 い二う三い四う夜露雪の日しもの關  
 路も共に此の身を馴染重ねて仲はま  
 る山たゞ圓かれと思ひそめたがえん  
 ぢやえ、梅ごさんく櫻は何れ兄や  
 ら弟やらわきて言れぬな花のいろへ  
 あやめかきつばたは何れ姉やら妹や  
 らわきて言れぬな花のいろへ、西も  
 ひがしもみんな見に来た花の顔さよ  
 え、見ればこひぞ増すえさよえ、か  
 はゆらしさの花むすめこひの手習つ  
 ひ見ならひて何人に見しよさて紅鐵  
 漿つきよぞ、みんな主への心中だて  
 おく嬉し、おく嬉し、末はかうぢや  
 にな、さうなるまではさんと言はず

にすまそぞえこ、番紙さへいつぱり  
 か嘘かまここか何うもならぬほど逢  
 ひに来た、ふつかり悱氣せまいぞこ  
 たしなんでみても、なさげなや、女  
 には何がなる殿御殿御の氣が知れぬ  
 氣がしれぬ、悪性なく、氣が知れぬ  
 うらみうらみてかこち泣露を含みし  
 さくら花、さばらば落ちん風情なり  
 おもしろの四季の眺めや、三國一の  
 富士のやま、雪がと見れば花の吹雪  
 か、吉野やま散り来るあ散り来る、  
 らしやま朝日山やまを見渡せば歌の  
 中やま石山の稻荷石山のいなり、さ  
 る程にさるほごに、さるほごに寺々  
 の鐘月落ち、鶏鳴いて霜雪天にみち  
 潮、程なく此の山寺の江村の漁火、  
 愁に對して人々眠れば好き障ぞ立  
 舞ふ様にれらひ寄つて撞かんせし

が思へば此の鐘恨めしやさて龍顔に  
 手をかけ飛ぶよと見えしがひきかづ  
 いてぞ失せにける。

## 文 樂 座 使 用 料 (一日)

時 間 場 所	収容人員	晝 (自 正 午 至午後五時)		夜 (自午後六時 至同十一時)	晝 (自 正 午 至午後十時)	
		平日	土曜	日曜 祭	平日	土曜
文 樂 座	約 850人	平日	80 圓	100 圓	160 圓	160 圓
		土曜	80 圓	110 圓	170 圓	170 圓
		日曜 祭	90 圓	110 圓	180 圓	180 圓

◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

## 器 具 御 使 用 料

器 具 備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アブライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンペーパー		1枚1回 1圓
大 衝 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラヂエータ使用料		無料

# 大阪歌舞伎座

久々の歸演

## 曾我廼家五郎劇

第一日 國の御旗  
 第二日 幼友達  
 第三日 小判五十兩  
 第四日 湯の負  
 第五日 背負街投

・設備斷然東洋第一！

### アイス・スケート場

ウインタースポーツの王座！

新春への絶好の行樂！

毎日 午前十時 至午後十一時

日曜、祭日に限り午前九時より

一般外來入口 北側電車通り

・御願の方には幕間の時間を利用して自由にお出入りして頂けます。

大阪歌舞伎座 アイス・スケート場

座天辨	座日朝	座竹松	座花浪	座中	場劇阪大
切封日近 紅石天バ 井狗ン 蓮常 右のッ 地衛 獄門安ヤ	切封日近 春民忠 霞衆次 八の賣 百太出 八陽す 町	切封日近 彼女は僕を愛さない ロスチャイルド 窟王	休演	日初日一 第三淀鯉 第二繪口 第一旅本 中村鴈次郎追悼彌生興行 關西大歌舞伎	切封日近 愛折鶴 情の鶴 の川霧 價お千 値千霧
噫僕春 乃の江 木の丸 將結 軍鬻婚	白彦鐵 銀左 のさ 王九 座馬路	世銀麥 界鼠 の流 終線 り型秋	日初日一 第二雪之亟變化 第一色氣別物だり 新派劇五の替り 關西唯一の	第六上の巻 第五心道行思案衣餘 第四義經千本櫻 第三夜雨 第二羽行思案衣餘 第一上の巻	ぬお東春 れ琴京の たこのを 素佐英ご 肌助雄り

**お食事**

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

**賣店**

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

**お化粧とお手洗**

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

**お煙草**

一階二階廊下に喫煙室を備へてあります。からお煙草はぜひ此處で御願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

**御携帯品**

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。お帰りは混雑いたします。お成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致します。が不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

**お出口**

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

**貴重品**

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帯願ひます。

**お場席**

各自に御持ち下さい。切符に一枚づつ番號が附いて居ります。お場席の番號をお忘れないやうに御願ひいたします。

**聖内人へ**

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

**幕間中は**

案内人がお茶を差し上げます。から御休憩所でお飲み下さい。

**場内にて**

寫真撮影は絶対にお断りいたします。

**出演者**

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

**當座御使用**

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座います。から御使用下さい。△シタアルはレイトローション使用。

**御休憩の間**

**四ツ橋**

**文**

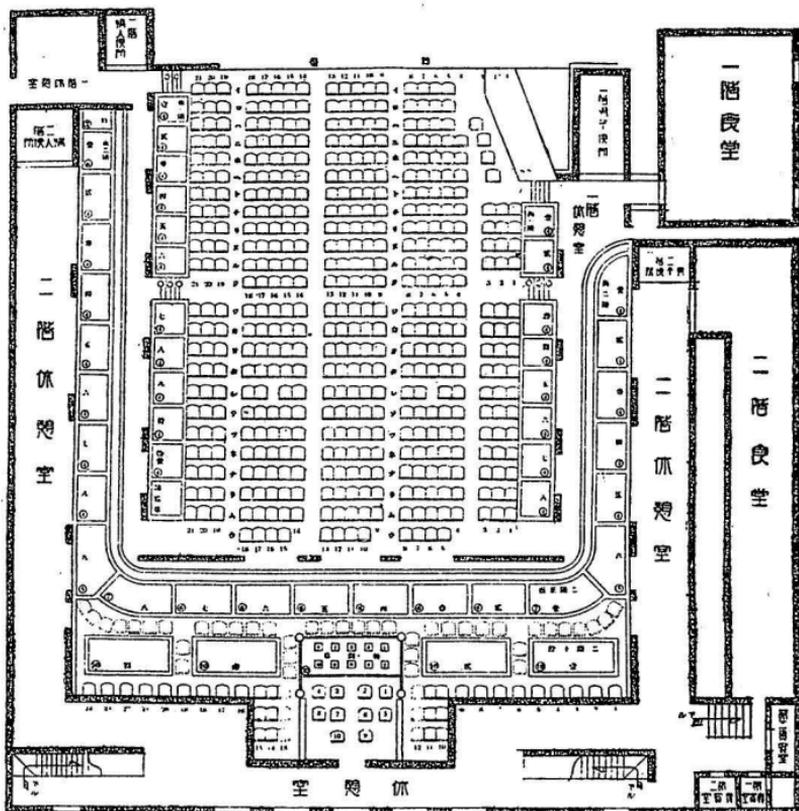
**樂**

**座**

前賣切符専用電話南四七一一番

電話南(75)三〇三二番  
三七八八番

# 文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上  
 大部分椅子席になつて居りま  
 すからお一人でも御愉快に洋  
 服でもお樂に御見物が出来、  
 またお出入が御自由です。  
 前、賣切符、壹等お座席。壹等椅  
 子席のお切符は五日前から發  
 賣致します。また五日以後の  
 お切符も壹等席に限り御豫約  
 申し上げますから上圖の座席  
 表に依つてお早く御望みの御  
 場席をお申し込みになればお  
 心のまゝにお好きな處が御自  
 由にされます御用命の節お呼  
 出しの電話は  
 南75四七一一番で御座ゐます  
 切符賣場右指定席切符は當日  
 前賣さし正面西側本家入口に  
 て發賣して居ります。  
 二等席。三等席切符は當日正  
 面入口にて發賣致します。  
 尙多人數様お團體様のお申込  
 も御相談いたします。

昭和十年二月二十八日印刷  
昭和十年三月一日發行

大坂・四ツ橋文樂座  
發行人 大塚 良三

良三

編輯

成山

桂三

三

印刷者

永井太三郎

印刷所

永井日英堂印刷所

大坂市西區土佐堀通一丁目

大坂市西區土佐堀通一丁目

大坂市西區土佐堀通一丁目

大坂市西區土佐堀通一丁目

大坂市西區土佐堀通一丁目

大坂市西區土佐堀通一丁目

大坂市西區土佐堀通一丁目

大坂市西區土佐堀通一丁目

は會集御の月三春る陽は

のじ感いる明なかや和

て場劇會宴の阪大

會宴御の座樂文

金五

圖

(御一人様)

一等椅子席で御觀覽をねがひ

お食事は皆様本位の御定食

お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

床本入り番付つき

お座席希望は御一人につき五十

錢上り

□お申込は二十人様以上をお請け致します。

□記念撮影のお寫眞は終演と同時に御持歸り出きるやういたし

しております。

□お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願いたします

□お申込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。

□お電話の御用は前賣専用南四七一一番へ。

しほ

# フクトーレ

壽式三番叟  
 修禪寺物語  
 桂川連理柵  
 信洲川中島合戦  
 蘇州冥途の飛脚  
 京鹿子娘道成寺

ほんごに

素顔すがほが

きれいに

なるの

氣きも朗ららよ！



東京 平尾賛平商店

彼氏のヒゲ剃り後に

私の素顔美化粧に

妹の通學整容に

アレ止メに

一番よい……化粧液！